

時空ラバーズ

～ JJKU Lovers ～



「ふあああー、やっと終わったぜ、まったく」

今週最後の、そして長くて退屈な授業の終わりを告げるチャイムの音に悟は大きく背伸びをした。

「さてと・・・」

空っぽのカバンを手に取ると、悟は席を立って教室の出口に向かって歩き出した。

「あーん、ちょっと待ってよ、悟」

これも空っぽのカバンを手にエリカが後を追う。

「悟はこれからどうするのかな？」

「んー・・・、エッチでもするか？」

「そだね」

エリカは悟の腕に自分の腕を絡めると、周りの目も気にせず悟を見つめた。

「そんなに俺ってイイ男か？」

「うん、サイコー！」

「今夜はもっと最高になるぜ！」

「マジ？」

「ああ、湾岸だ」

「超サイコー！」

夜の湾岸ハイウェイ。

真夏の夜の闇を切り裂くようにヘッドライトの光が交錯する。そして激しい爆音。

30台以上のオートバイの集団がジグザグに走り抜ける。

先行する集団是那威賭（ナイト）、そして後ろを固める集団はレディースチーム・天使（エンジェル）。

この辺りでは知らぬ者がいない暴走族である。

紫色の特攻服で身を固めた黒岩悟（18歳）はこの那威賭（ナイト）のリーダーであり、特攻隊長なのだ。

愛車はミツボシ400GT。いわゆる『族仕様』に改造されたマシンである。

悟はこの愛車を『神機』と名付けていた。

特攻隊長とは、常に集団の先頭を走り、チームを先導する役目を受け持っている。

邪魔な車があれば、威嚇して道を空けさせることもある。

その場合、他車と危険なまでに接近することも多く、ずば抜けたライディングテクニックが要求される持ち場である。

そして、ピンクの特攻服に身を包んで後続集団の先頭に行くのは天使（エンジェル）のリーダー、長井エリカ（18歳）。

愛車はミツボシ250SP。こちらもレディース仕様に改造済みだ。

今宵は金曜日の夜にも関わらず車も比較的少なく、走りを楽しむには最高のコンディションだった。

悟は何度も得意のターンを華麗に決めてみせる。

道路の幅を目一杯に使って右に左に大きく切り返す。

その度に、ステップが路面に擦り付けられて激しく火花が飛び散る。

夜目には綺麗な花火のようにも見える。

やがて悟はスピードを落として、チームの全車を先に行かせた。

そして最後尾の位置からアクセル全開のウィリー走行（前輪を浮かせて後輪だけで走る技）で一気に全車を追い越して、再び持ち場である先頭に帰っていく。

まさに変幻自在の走りである。

やはりライディングテクニックで悟の右に出る者はいない。

エリカは、悟の妙技に心を奪われていた。

「悟、サイコーー！」

エリカが叫ぶ。

その声に応えるように悟は見事なジャックナイフ（急ブレーキをかけて後輪を浮かせる技）を披露した。

やがて遠くにパトカーのサイレンが聞こえ出した。今夜の饗宴もそろそろ終わりの頃合である。

悟が左手を高く上げ、その手を左右に大きく振った。全車解散の合図である。

各メンバー達は三々五々に散っていった。

そして悟もエリカとつるんで暗闇の裏道へと消えた。

やっと悟とエリカが2人だけになって過ごす時間がやってきた。

2人にとって、深夜暴走の後に待っている大切な時間なのだ。

悟の部屋に入ったのは、既に深夜2時を回っていた。

悟は特攻服を脱ぎ、そしてエリカも全てを脱ぎ捨てた。

「悟・・・今日も最高にカッコ良かった。私、もう駄目・・・お願い、私を冷まして」

「エリカ・・・」

悟はエリカを優しくベッドに押し倒した。

「悟・・・私だけのものよ。愛してるの」

「俺もだ・・・エリカ、お前を愛してる」

2人の唇が触れ合う。焦らすように軽いキスを何度もかわした後、悟はエリカの舌を求めた。

エリカも目を閉じて悟の舌に自分の舌を絡ませ、愛する男の唾液をタップリと味わった。

「お願い・・・早く食べて・・・」

「ああ、駄目って言われても食べてやる」

悟はエリカの首筋に舌を這わせ、そして軽く咬んだ。

「あ、あん・・・」

体の芯を電気が流れたような快感が走る。

エリカの白くて柔らかな乳房が揉みしだかれ、悟の分身が固く屹立する。

「エリカ・・・お前、最高だ」

エリカは夢心地だった。

愛する男に全てを捧げ、優しく弄ばれる快感。

何度もキスをして、何度も愛し合い、そして何度も果てた。

求めても求めても、まだまだ求め足りなくて2人は貪欲に愛し合った。

何回目かの交わりの後、ふと気がつくと夜が明け始めていた。

「もう朝なの？」

「そうらしいな」

「まだまだ離れたくないよ。もっと愛して」

「わかってる・・・」

だが、悟は突然エリカから体を離れた。

「やだ、離れちゃ嫌」

「エリカ、お前、朝日を見たことがあるか？」

「朝日？ 無いよ」

「今から2人で朝日を見に行かないか？」

「今から？」

「今すぐだ」

「悟と一緒に居られるなら、どこにだって行く」

「よし、決まりだ」

2人は急いで服を身に着けると部屋を出た。

もう特攻服ではない。悟は白いTシャツにジーンズ、エリカも悟の部屋に置いておいたタンクトップとミニスカートだ。

悟のマシンに2人乗りして湾岸ハイウェイを飛ばした。間もなく朝日が昇る。

高台にあるパーキングエリアに入ってエンジンを止め、2人で東の水平線を眺めた。

今、まさに水平線の1点が黄金色に輝きだした。

やがて、その点が短い線となり、その線が水平線に沿ってどんどん長くなり始めた。

「昇るぞ」

「うん・・・」

そして、長い線が少しずつ盛り上がって半円状に見える頃には、直接見るのが辛いほどの輝きを放ちだしていた。

水平線の彼方にある太陽から海の上を2人に向かって光の帯が伸びている。波間をきらめく黄金色のハイウェイのようだ。

「綺麗・・・」

2人は暫くの間、声も出さずにその光景を見つめた。

その巨大な火の玉から発せられる光の粒子が、2人を浄化していくように思えた。

エリカが悟にピッタリと寄り添って、逆光でまるで1つの影のようになった。

その時、2人は心の絆がどんどん深まっていくのを実感した。

そして悟もエリカも2人で一緒に居られる幸せを存分に噛みしめていた。

それから10分ほど、二人は昇る朝日を無心で見つめていた。

「もう完全に昇っちゃったね。いつものお日様になっちゃったよ」

「また、いつでも見に来られるさ」

「うん・・・でも愛し合った後で見る朝日って最高だね」

「ちょっと目が眩んだけどな」

「フッフ、私達って夜行性だもんね」

「さあ、帰ろう」

「うん」

2人は再び車上の人となった。一路、悟の部屋へまっしぐらである。

悟もエリカも昨夜は一睡もしていない。

そして今夜、また仲間と走りに行くのだ。

今のうちに、たっぷりと睡眠を取っておかなければ今宵の饗宴に影響してしまう。

部屋に帰ると、2人はもつれ合うようにベッドに倒れ込んだ。

ようやく眠気を覚え始めていた。

だが、このまま眠ってしまうのをためらうように2人は見つめあい、抱き合って長い長いキスをした。

「おやすみ、悟」

「おやすみ、エリカ」

そして2人は深い眠りの中に落ちていった。

風を感じていた。

悟は、いつも通りに先頭を走っていたが、今夜は特に爽快な気分だった。昨夜から今朝にかけてエリカと過ごした濃厚な時間が悟を心身ともにリフレッシュさせていたのだった。

今夜のコースは市街地を抜け、高台の上にある森林公園の駐車場がゴールである。問題は市街地で警察をどうやって手玉にするかである。まさに特攻隊長の腕の見せ所だった。そして悟は自信に満ち溢れていた。今夜の俺は何だって出来る。そんな気分であった。

やがて一団は市街地に入っていった。

まだパトカーは現れないが油断は禁物である。

一般車両が恐れをなして道の端に避ける。その空いた中央を、一団は隊列を組んで進んでいった。

とある交差点に差し掛かった時である。右の方から赤い光が近づいてくるのが見えた。早速パトカーのお出ましである。悟は笑みをこぼした。

「奴は俺が引き付ける。みんなは予定通り進んでくれ！」

悟は鮮やかなターンを決めてパトカーに向かって行った。

そしてパトカーの直前まで来ると、見事なフローティングターン（前輪を浮かせ、後輪だけでバイクを立たせて、その場で向きを変える高等テクニック）でパトカーと同方向に進路を変えて、鼻先を押しやるようにしてゆっくりと蛇行を繰り返した。

悟の妨害で、パトカーの乗員は明らかにイラつき始めていた。

「さてと・・・もうそろそろ俺もズラかるか」

悟はパトカーに向けて、お尻ペンペンの挑発行為をしてからスピードを上げた。その挑発に怒り狂ったパトカーは、悟を追いかけ始めた。

「思うツボだ・・・」

悟はニヤリとほくそ笑んだ。

この先の交差点を左折すれば先行する一団に追いつく。

しかし、悟はあえて右折した。もちろんパトカーの追跡を巻くためだ。  
先行部隊は既に影も形も見えないほどに離れているので、パトカーは悟を追って右折してきた。  
悟はパトカーを出来るだけ遠くに誘き出すため、ブッチ切りにならない程度にスピードを調節しながら逃げ続けた。

そして、ビルで四方が見通せない小さな交差点を信号無視で左折した瞬間だった。

「し、しまった！」

突如としてビルの陰から大型トラックが現れたのだ。真正面だ！  
しかも大型トラックは前方の信号が青なので、スピードは全く落とさず突っ込んで来る。  
こちらもスピードが乗っているから急には旋回半径を変えられない。  
たとえブレーキをかけても間に合わない。

正面衝突だ！

もう悟の目前には、大型トラックのヘッドライトの眩い光が大きく迫っていた。  
全ては手遅れだった。

「エリカー———！」

悟の絶叫が響いた。

ガガガー——ン！

闇を切り裂くような大音響が辺りに響き渡り、一瞬にして全ての光が消え失せた。

エリカは不安を覚えていた。

あの交差点で悟と別れてから、間もなく30分が経とうとしていた。  
もう到着してもよい時間だった。

まさかパクられたりしてないよね・・・。

そんなドジじゃない。

じゃあ事故？

あの悟に限って、そんな事がある筈がない。

そう自分に言い聞かせてみても、エリカの胸から不安が去ることはなかった。

だが、周りのメンバー達は未だに興奮冷めやらずといった感じで、誰も悟のことを気にかけている様子がない。

エリカの不安な気持ちはだんだん仲間への怒りの感情に変わっていった。

「ちょっと、あんた達は悟が心配じゃないの？」

「はあ？」

「自分達のリーダーが、こんな時間まで戻ってこないっていうのに、あんた達は平気なの？」

「長井チャン、あんた何言ってんの？ 悟って誰だよ？ 新しい彼氏の名前か？ ギャハハッ」

那威賭（ナイト）の副官である佐藤直樹がふざけた口調でエリカに突っ掛かってきた。

「佐藤！ てめえ、ふざけんな！」

エリカのこめかみに青筋が立った。

「おお・・・怖い怖い。長井チャン、何を怒ってんだよ・・・」

「誰だって怒るに決まってるだろ！ 人が心配してる時に・・・」

「いや・・・だから、その悟って何者だよ？」

「てめえ、ぶっ殺されてえのか？」

エリカは佐藤の胸倉を掴んだ。

「エリカ先輩、止めて！」

天使（エンジェル）のサブリーダーである伊藤麻衣が、エリカの腕にしがみ付いた。

「先輩、今日は何だか変です。どうしちゃったんですか？」

「麻衣、お前までそんなことを言うの？ あんた達って、そんなに薄情な奴らだったの？」

エリカは情けなくて、悔しくて、その瞳からポロポロと涙をこぼした。

「長井チャン・・・」

「先輩・・・」

メンバー達は、呆気にとられた様子でエリカを見つめていた。

「もういい！ あんた達なんか当てにしない！」

エリカは自分のオートバイに跨り、エンジンをかけると駐車場を飛び出して行った。

那威賭（ナイト）や天使（エンジェル）のメンバー達は、ただ呆然として走り去るエリカを見送っていた。

エリカは30分前に悟と別れたあの交差点に戻ってみた。

ここから悟はパトカーに向かっていった・・・。

それから？

どこに行ったの？

とりあえず、悟が走り去った方向にエリカも走り出した。

交差点から200mほど行った辺りの路面に、何か黒い跡が見えた。

近寄ってよく見ると、それはオートバイのタイヤ痕であった。

センターラインから反対車線に向けて、弓なりのタイヤ痕が鮮やかに描かれていた。

それがフローティングターンの時に残される痕跡であることをエリカは知っていた。

悟は、ここで方向転換したのね・・・。

とすれば、また交差点に戻った筈だ。

エリカは再び交差点に戻って辺りの路面を注意深く見つめた。

しかし、そこには悟が残した痕跡は無かった。

手がかりを失ったエリカは、それでも諦めずに探し続けた。

当てなど何も無い。

しかし、エリカは悟の姿を求めて街の道という道を探し回った。

どこにも居ない。

念のため、警察署の近くにも行ってみた。

検挙された暴走族のオートバイは、駐車場奥の倉庫に保管されるのが常だった。

エリカは近くでオートバイを降りて、警察署の隣のビルの非常階段を昇った。

そこからは問題の倉庫が覗ける可能性がある。

運がよいことに倉庫のシャッターは全開になっていて、数人の警官が捜査用車両の整備をしているのが見えた。

しかし、その隅から隅まで覗いてみても、悟のオートバイは見当たらなかった。

どうやら捕まったのではなさそうだ。

悟の自宅にも行った。

まさかエリカを置いて先に帰る筈など無いが、可能性のある場所は探さずにはいられなかった。

しかし、予想したとおり駐車場にオートバイは停まっていない。

いったい何処へ行ってしまったのか？

不安で不安で仕方がなかった。

どこかで人知れず死んでいるのではないか？

どんなに打ち消しても、次から次と悪い事ばかりを考えてしまう。

不安で心が張り裂けそうで、エリカは涙があふれて止まらなかった。

「どこに行っちゃったのよ、悟・・・」

エリカは虚しさを抱えたまま、再び走り出した。

いつの間にか夜が明けようとしていた。

さんざん探し回っても、悟の行方は全く分からなかった。

こうなったら悟の親に話を聞くしかない。

もしも悟の身に何か起きたとしたら、真っ先に親に連絡が行く筈だ。

だが、悟の両親がエリカのことを良く思っていないことは分かっていた。

高校に入って間もなく、悟とエリカは付き合いだしたのだが、それと時期を同じくして悟は暴走族に入ったのだ。

もちろんエリカも悟に誘われてレディースチームに入った。

だが、悟の両親はエリカが悟を暴走族に引き込んだと思っているらしかった。

しかも深夜に悟の部屋に出入りして、好き勝手にやっていたのであるから親から良く思われる筈はなかった。

電話をかけたところで素直に教えてくれるだろうか？

さんざん迷った挙句に、エリカは意を決して悟の家に電話をかけた。

プルルルルー・・・プルルルルー・・・プルルルルー・・・。

誰も出ない。

しばらく時間をおいてから、もう1度かけてみたが同じだった。

出かけてるのかな。

やっぱり悟の身に何か起きたの？

どうしよう・・・。

エリカの心に絶望感が広がっていった。

いつもの日曜日であれば悟と2人の時間をタツプリ楽しんでいる筈の午後2時。

これまでの脳天気なほどの幸せ気分がガラガラと音を立てて崩れていくようだった。

夜になり、エリカは絶望的な寂しさの中、もう1度悟の家に電話をかけた。

プルルルルー・・・プルルルルー・・・ガチャ！

「はい、黒岩でございますが・・・」

悟の母親が出た。

聞き覚えのある悟の母親の声に、エリカは緊張しながらも、すぎるような気持ちで話し始めた。

「あ、あの・・・こんな夜にすみません・・・長井ですけど悟君いらっしゃいますか？」

「長井さんですか？ ごめんなさい、ちょっと聞き取れなかったんですけど、誰にお繋ぎすればよろしいのかしら？」

「悟君です」

「・・・サトル・・・君ですか？」

「はい、お願いします」

エリカは緊張で全身から汗が噴き出していた。

電話から聞こえる悟の母親の声は優しくて温もりがあった。

これまでエリカと悟の母親とは数えるほどしか話をしたことがないが、その時の声とはまるで違うのだ。

これまでエリカに対して話す声は、どこか冷たく突き放したような感じがした。

だが、今のこの優しい声はエリカだと気付いていないのだろうか？

「あの・・・私、悟君とお付き合いしてるエリカですが・・・」

「はぁ・・・エリカさんですか？」

何故か悟の母親の声には困惑の様子が窺えた。

「エリカさん？ どちらにおかけになってますか？ うちにはサトルという人間は居ませんが・・・」

「えっ！ でも黒岩さんのお宅ですよね？」

「はい、確かにウチは黒岩ですが、でも私共の子供には娘が1人いるだけなんですよ。きっと、電話番号をお間違えになっていらっしゃるわ」

「そ、そんな・・・」

「それでは失礼します」

電話が切れた。

どうということ？

絶対に間違い電話なんかじゃないよ。

今の声は確かに悟の母親の声だった。

子供は娘が1人だけだなんて見え透いた嘘を何故つくの？

その娘というのは悟の姉で大学生の彩子のことだろう。

そういえば、家を出て一人暮らしをしている彩子とは一度も会ったことはなかった。

一緒に住んでいた頃は悟と仲がよかったと悟から聞いていたが。

つまり、それだけ私のことが嫌いだってこと？

悟に何があったのかさえ教えたくないの？

ひど過ぎるよ・・・。

エリカはその夜も一睡もできずに朝まで泣き通した。

月曜日、エリカは重い心と体を引きずるようにして学校に行った。

あれから1度も悟からの連絡は無い。

エリカから悟の携帯電話にかけてみても通じなかった。

教室に入ると奇妙なことに気がついた。

席が1つ足りないのだ。

窓際の一番後ろの席、それは悟の席だった。

どうして？

エリカは何だか悪い夢の続きを見ているような気分だった。

近くにいた同級生に聞いてみた。

「ねえ、悟の席、どうなったの？」

「えっ？ 誰？」

「悟・・・」

「サトル？ って、そんな人、このクラスにいたっけ？」

「・・・・・・・・」

まただ・・・ここでも悟の存在が消えている。

エリカは教室を飛び出すと職員室に向かった。

担任の青山先生を探す。居た！

「先生！」

「おう、おはよう長井。どうした？」

「先生だけは悟のこと知ってるよね？」

「あ？ サトル？」

「先生・・・」

「ウチの生徒か？」

「先生の担任の・・・」

「おいおい、勘弁してくれよ。お前らワルガキどもの面倒を見るだけでも精一杯なのに、新手のご登場か？ アッハッハ」

エリカは絶望感でその場にへたり込んだ。

「お、おい、長井、大丈夫か？ お前、顔色が悪いぞ」

「先生・・・クラスの写真を見せて」

「写真？ いいけど」

青山先生は、自分の机の引き出しを開けてゴソゴソやっていたが、やがて1枚の集合写真を差し出した。

今年の春にクラス全員で桜の会を催した時のものだ。あの時は確かに悟も一緒だった。だが、その写真の中でエリカの隣に居た筈の悟の姿は、無かった。

悟は目覚めた。

長い眠りから覚めたような気分だった。

少し頭が重い。

意識がはっきりして最初に目に飛び込んできたのは、粗末な木目の天井板だった。

どこだ、ここは？

体が痛い・・・よく見ると寝ていたのはベッドではなかった。

これって・・・ハンモックじゃねえか。

それはキャンバス地で出来たハンモックだった。

周りを見回すと、同じようなハンモックが沢山吊られていて、悟と同年代らしい若者達が大勢寝ていた。

さらに辺りの様子をよく見ると、そこは前にTVで見たことのある昔の学校の教室にそっくりな古い木造の建物の中の一部屋であった。

何で俺がこんなところで寝てるんだ？

周りの奴らは誰だ？

悟は頭が混乱してきた。

ここは一体どこだ？

もしかして・・・。

刑務所？

悟は急に不安な気持ちになった。

そして辺りの静けさが、その気持ちを益々増幅させた。

誰かを問い質したい。今すぐ自分の置かれている状況を確認したい。そんな欲求が湧いた。

しかし、周りの若者達はよく眠っている。今ここで自分が騒ぎ出したら、彼らを起こしてしまうことになる。

悟は少しずつ冷静さを取り戻し始めた。

焦るな・・・考えるんだ・・・何があったのか思い出すんだ。

俺がここで眠りにつく前に起きたことは・・・。

突如として眩い光が悟の脳裏に甦った。

昨夜の光景がまざまざと甦ってきた。

そうだ、俺はパトカーから逃げる途中で大型トラックと正面衝突をした。

確かにあの時、俺は事故に遭った筈だ。

ただ、その瞬間には痛みも何も感じなかった。

憶えているのは、あの瞬間に真っ暗で深い所に落ち込んで行くような感覚だけだった。

だが、それ以外には何も憶えていない・・・。

悟は改めて自分の体をあちこち触ってみた。

慣れないハンモックで寝ていたための体の痛さはあるが、どこも怪我をした様子は無い。

あの状況で事故を起こしたら、即死しても不思議ではない。

それなのに自分はこうしてピンピンしている。

一体、あれから俺はどうなったんだ？

考えれば考える程に分からなくなってくる。

その時であった。

「総員起こし！ 総員起こし！」

部屋の壁に備え付けられたスピーカーから大音量で放送があった。

その途端に、周りで寝ていた若者達が一斉に飛び起きて着替えを始めた。

「おっ？ 何だ？ 何が始まったんだ？」

悟は状況が呑み込めないままに、周りの真似をして起き出した。

見ると、着替えが終わった者からハンモックの片付けに入っている。

要領が分からずモタモタしている悟を見かねて、隣に寝ていた若者が小声で話しかけてきた。

「大丈夫ですか？ 自分が手伝います」

「えっ？ ああ、ありがとう」

そうして、とりあえず着替えと寝床の片付けが終わり、これまた周りに急かされるように洗面を済ませた。

先程の若者が悟にまた声をかけた。

「さあ、急いでくださいよ。講堂に集合です」

周りの若者達について講堂と呼ばれる古い体育館のような場所へ行くと全員が整列を始めた。誰も一言も発しない。

仕方なく悟もとりあえず一番後ろに並んだ。

前を見ると、壇上に軍服のような服を着た偉そうな態度の中年男が立って全員を睨んでいた。そして全員の整列が終ったのを見届けると中年男は大声で話し始めた。

「貴様ら、全くなっとらん！ 総員起こしから整列完了まで25分もかかったぞ。初日からこれでは先が思いやられる！」

悟は耳を疑った。起床してからたったの25分でこの状態まで持ってくるなんて、朝に弱い悟としては神技にも思える早さである。

中年男が言葉を続けた。

「まあよい、これから毎日このような訓練を続けるからな！ そうすればここを卒業する頃には15分で出来るようになる筈だ！」

悟はこの言葉を聞いて思わずゲンナリした。この中年男は俺達にこんな事を毎日やらせる気であるのか。

何だか知らないが、俺はとんでもない場所に連れてこられたようだと思つた。

中年男に代わって、今度は年配の軍服の男が壇上に立って話し始めた。

「諸君は大変な競争を勝ち抜いてこの飛行学校に入学を果たした。それと同時に君達は栄えある帝国海軍の軍人となったのであるから、これからしっかりと勉強してもらいたい。以上だ」

先程の中年男と違って、この年配の男の言葉には重みがあった。

しかし・・・。

悟は混乱の極致にいた。

飛行学校って何だよ？

確かに俺は飛行少年だけど、今日からは飛行少年になるって訳か？

寒いジョークだよ全く。

それに帝国海軍って何のことだ？

自衛隊か？ 俺は自衛隊に強制的に入隊させられたってことか？

そうか・・・少しずつ分かってきたぞ。

俺はあの事故で奇跡的に助かったんだ。

だが、制裁の意味でここに連れて来られたって訳だな。な一るほど。

悟は年配の男の話を聞きながら自分なりに頭を整理していた。

だが、次に壇上に上がった男の言葉に悟は自分の耳を疑った。

壇上の男は言った。

「私がこれから2ヶ月の間お前たちの隊長となる千葉大尉だ」

この千葉大尉は年齢が20代の半ばくらいに見えた。

「貴様達も知っているように、現在我が日本帝国海軍はアメリカ、イギリス、オーストラリアといった大国と戦争をしている。そして開戦時は想像も出来なかった程に戦域が広がってきた。当然兵員の数も足りなくなる。そこで貴様達がこれから猛訓練で憧れのゼロ戦パイロットとなって最前線に出て行くのだ。しっかりやれよ！」

千葉大尉はまるで兄貴分のような話しぶりだ。

悟は一発で千葉大尉のことを気に入った。

しかし、千葉大尉は気になるキーワードを言っていた。

日本が戦争をしている？

アメリカと？

おいおい、冗談だろ？

この平成23年の平和な日本が戦争なんて。

TVでも何も言ってなかったぞ。

自衛隊って、中ではこんな現実離れした話をこしらえて戦争ごっこをしてたのか？

しかもゼロ戦って、いつの話だよ。そんなの歴史の教科書に載ってる大昔の戦闘機だろ・・・。

悟が困惑するのも無理は無かった。余りにも現実離れした展開なのだ。

しかし、悟はまだ知らなかったのである。

自分がその歴史の中に放り出されてしまったことを・・・。

もう2日もエリカは学校に行っていなかった。

家から出る気が起きないのだ。

誰かに悟の話をする度に奇妙な顔をされ、冗談を言っていると思われるだけである。

悟のことで、自分だけが周りから浮いているようだった。

元来は明るい性格のエリカだが、今はさすがに暗く落ち込んでしまっていた。

それにしても、あの夜以来、何が変わってしまったのだろうか・・・。

悟の存在だけが、きれいさっぱり消え失せてしまった。

しかも、それは周りだけではなく、エリカ自身の周辺でも起きていた。

これまでに悟と一緒に撮った写真、悟から去年の誕生日にプレゼントされたハートのイヤリング、悟が部屋に忘れていったライター。

悟に繋がる様々な物がエリカの周りから消えてしまっていた。

ただ残っているのは思い出だけである。

こんなの・・・悲しすぎるよ・・・。

ただ泣き暮れるしかないエリカだった。

そんな時、天使（エンジェル）のサブリーダーである伊藤麻衣がエリカを訪ねてきた。

「エリカ先輩、学校を休んでるって聞きましたけど、具合でも悪いんですか？」

「どうせお前も私の頭がおかしくなったと思ってるんだろ？」

「そんな・・・」

「誰も私の言う事を信じちゃくれない」

「私、まだ先輩から話をちゃんと聞いてません」

「えっ？」

「先週の集会で先輩が突然変なこと・・・ごめんなさい・・・知らない人の事を持ち出して佐藤先輩と口論になりましたよね」

「知らない人・・・」

「月曜も学校で先輩がサトルっていう人の事でお友達と口論してたって噂で聞きました。私、心配なんです！」

「お前に話しても、どうせ信じちゃくれないよ」

「ちゃんと話を聞かせてください・・・」

麻衣の瞳から涙がこぼれ落ちた。

「麻衣・・・」

麻衣は心からエリカのことを心配していたのだ。

エリカはこれまでの事を麻衣に話した。

悟と出会った時まで遡らなければ麻衣の理解が得られないと思い、エリカは長い時間をかけて最初から丁寧に説明した。

そして、麻衣は最後まで黙って真剣な顔で話を聞いてくれた。

「・・・と言うことさ。全く変な話よ」

「先輩、それってもしかして・・・」

「何か知ってるの？」

「神隠し・・・」

「神隠し？」

「私が小さい頃、よく曾祖母が言ってました。言う事を聞かないと神隠しに遭うぞって」

エリカは少し呆れたが、真剣な表情で話す麻衣の様子に何も言わずに聞き入っていた。

「ある日、突然に人が消え失せてしまうんですって。しかも誰も消えた人のことを憶えていないんですって・・・私、それを聞いて怖くて怖くて」

「超自然現象ってやつかもね」

「はい、たぶん。昔はよくあったって曾祖母から聞きました。そして、まれに何十年も経ってから戻ってくることもあるらしいです」

「何十年後か・・・そんなに待てないよ」

「ごめんなさい、くだらない話をして。でも何だか先輩の話を聞いてたら神隠しにそっくりだなんて思ったんです」

エリカは真剣な顔で話す麻衣のことが急に愛おしくなった。

今、自分にはこの子しか味方がいない。ちょっぴり頼りないけど、麻衣がいてくれたら狂わずにいられるような気がした。

エリカは麻衣をそっと抱き寄せた。

「先輩・・・」

「麻衣、ありがとう」

「先輩・・・私、ずっとエリカ先輩に憧れていたんです・・・先輩のことが好きです」

「私も麻衣が好きよ」

「うれしい・・・」

感極まった麻衣はエリカにしがみ付いてシクシク泣き始めた。

「私がエリカ先輩を守ります・・・何だって手伝います。何をすればいいですか？」

「何って・・・私だって分からないわよ・・・でもね」

「はい・・・」

キラキラとした瞳でエリカを見つめる麻衣に、妙に乙女チックな様子を感じたエリカだった。この子に無理を言ってはいけないとエリカは思った。ただそばにいてくれるだけでいいのだ。

「しばらく私の家で合宿しようか？」

「ほ、ほんとに？」

「迷惑じゃない？」

「迷惑だなんて・・・そんな・・・私、超ウレシーです。エリカ先輩と一緒に住めるなんて！」

「よろしくね、麻衣」

「こちらこそ・・・私これからすぐに家に帰って準備してきます」

そう言うが早いか、麻衣は飛び出して行った。

それからしばらくして麻衣がやって来た。しかも驚くほどの荷物を抱えて。

「あんた・・・もしかして永住するつもり？」

「えへへ、ふつつか者ですが、よろしくお願いします」

エリカは思わず笑いがこみあげてきた。なんだか久しぶりに笑ったような気分だった。

麻衣も、そんなエリカを見て心からホッとしていた。

そしてエリカの家族も、この突然の珍客を喜んでくれた。ここ数日の娘の変貌ぶりに家族も心を痛めていたのだ。エリカの母親は麻衣の部屋を用意しようとした。

「麻衣ちゃん、少し狭いけどエリカの隣の部屋を使ってね」

「お母さん、私、エリカ先輩と同じ部屋じゃ駄目ですか？」

「えっ？ エリカと同じ部屋でいいの？　ウチは別に構わないけど」

「もちろんです。ねっ、先輩？」

「えっ？　あ、うん。お母さん、そういうことだから」

こうして、エリカと麻衣の奇妙な同棲生活が始まった。

その夜、エリカと麻衣は一緒にお風呂に入った。

「うわー、エリカ先輩ってナイスバディ・・・おっばいも大きいし」

「やだ、そんなに見ないでよ。恥ずかしい」

「いいなー、麻衣もそんな体になりたい」

「麻衣だってイイ体してるじゃん。男が放ってほかないでしょ？」

「それが・・・まだ男の人と付き合ったこと無いんです」

「それじゃ処女？」

「・・・はい」

消え入りそうな小声の返事だった。

2人で湯船を出ると、まず麻衣がエリカの背中を流し、その後でエリカが麻衣の背中を流した。先輩に背中を流させて麻衣は恐縮していたが、とても嬉しそうな様子だった。

「先輩は、そのサトルさんと経験済みなんですよ？」

「うん・・・いっぱいしちゃった、エヘヘ」

「エッチって気持ちいいんですか？」

「それはそれは最高に気持ちいいのよ。でも処女喪失の時は痛かったけどね」

「それもサトルさん？」

「もち、私は悟一筋だもん」

その時、エリカは突然閃いた。悟の存在が唯一残る場所がエリカ自身の体にあるではないか。エリカは悟以外の男を知らないのだ。

とすれば・・・。

エリカは麻衣に気付かれないように自分の秘部に指を差し入れた。

抵抗なく、指はスルリと膣内に入った。軽く快感も感じて、その瞬間に悟との愛の営みの記憶がまざまざと蘇ってきた。

「やっぱり・・・」

「えっ？先輩、何ですか？」

「あ、何でもない」

「私も早く経験してみたいです」

「麻衣は可愛いから、すぐに経験できるわよ」

「先輩が男だったら、今夜にでも捧げちゃうのになー」

「麻衣ったら」

2人はじゃれ合い笑い合った。

しかし、エリカは1人確信していた。

悟の存在は自分の妄想なんかじゃない。それをこの体が証明してくれたのである。

悟は信じられない光景を目の当たりにしていた。

午前中に隊内見学ということで、施設の各所を連れ回されたのであるが、その時に見た外の景色がまるで前時代的なものであったのだ。

おいおい、確かここは霞ヶ浦だって教官は言ってたよな。

霞ヶ浦なら前にエリカとつるんで来たことがあるけど、こんな景色じゃなかったぞ。

第一、見える範囲を通っている道路という道路が全て未舗装なのだ。電柱も全て木製。どこに行っても煩いくらいに設置されている道路標識も見えない。

建物の数も少ないし、ビルなんて1つも見えないのだ。

そして、案内された施設がことごとく古い木造建築である。

ここは本当に日本か？

どこかの開発途上国に連れてこられたんじゃないのか？

遠くの道をリヤカーを引きながら歩いている老婦人が見える。

頭に手ぬぐいを巻いて、白い割烹着を着ている。しかもモンペをはいているのだ。

まさに歴史の教科書に載っていた写真の、昔の日本の景色にそっくりである。

悟は誰かに聞きたい衝動にかられていた。

しかし、無駄口を叩くことは事前に教官から厳しく戒められていた。

実際、つい隣と会話をしてしまった若者が、教官から鉄拳制裁を加えられたのを見たばかりだ。

ここは少し大人しくしていた方が身のためだ。

こうして隊内見学が終わると、今朝寝していた部屋に戻ってきた。

改めて見てみると、そこはまさに教室そのものである。

粗末な木製のテーブルと椅子が備え付けられているのだ。

昨夜はここにハンモックを吊って寝ていた訳である。

この場所で昼食となった。何人かの若者が食事担当として、既に準備を整えていた。

やがて食事が始まったのであるが、そのメニューがまた情けない。

麦飯と具の少ない味噌汁と野菜の煮っ転がしである。それに取って付けたように牛乳1本と生卵1個がついていた。

こんなメシ、食欲も湧かねえよ・・・。

しかし、教官はそんな悟の心を読んだかのように言った。

「今、日本は非常に厳しい食事情にある。これだけの食事が摂れるのは貴様達が軍人だからだ。市井の人達が我慢して我々に優先的に食料を回してくれるおかげなのだ。皆ありがたく頂くように」

全く味気ない昼食が終わり、少しの休憩の後で午後の科目が始まった。

飛行機の操縦に必要な知識についての授業らしい。

しかし、これは悟の興味を引いた。

何しろ悟はゲームセンターで1番好きなのはフライトシミュレーターだったのだ。

ジェット戦闘機を操って敵の爆撃機や戦闘機を撃墜するのは悟の得意技であった。

そのゲームセンターでの記憶が突然蘇った。エリカと2人で行った時のことだ。

そういえば俺が突然姿を消したからエリカは心配しているだろう。だが今はそれを考えても仕方がない。いずれ連絡を取れるだろう。

そのゲームセンターでのこと、エリカは悟がフライトシミュレーターに夢中になっているのが不満だったらしい。

何度も脇腹を突かれて文句を言われたことを思い出したのだ。

「ねえ、悟ったら・・・そんなの止めてクレーンゲームしようよ」

「もうちょっと・・・あと少しで・・・そら、やったぞ！ 敵機撃墜！」

「もー・・・そんな野蛮なゲームの何が面白いのよー・・・」

女にはこの面白さは分かるまい、そう悟は思っていた。

まさか、ここでその戦闘機の勉強をすることになるろうとは、その時は想像もしなかったのである。

普段、勉強嫌いの悟でも自分の興味がある分野であれば集中力は人一倍であった。

教官の話す飛行理論の内容は悟の頭にピシッと記憶されていった。

やがて1日の科目が全て終わり、夕食と入浴も済んで、あとは就寝までの時間を各自思い思いに過ごすこととなった。

やっと自由時間になったのである。とは言っても軍隊のことであるから制約は多く、建物から外に出ることは禁じられていた。

しかし悟にとっては待ちに待った時間であった。

悟は今朝、ハンモックの片付けの時に手伝ってくれた若者にさっそく声をかけた。

「やあ、今朝はありがとう。俺は黒岩悟だ。18歳なんだ」

「自分は田中浩次であります。17歳です」

「よろしく頼む。ところで知ってたら教えて欲しいんだけど・・・」

「はい、何でも聞いてください。分かることならお教えします」

「ここは一体どこ？」

「はっ？ く、黒岩さん・・・冗談ですか？」

「いや、その、この正式名称を忘れちゃって」

「ここは、大日本帝国海軍の霞ヶ浦航空隊であります。飛行機操縦に関する初等教育の場であり  
ます。そのくらい黒岩さんをご存知ですよ？」

「も、もちろん知ってるに決まってるよ」

「今日の午後の座学、難しかったですね。自分は付いていけなかったであります」

「えっ？ 何が難しかったんだ？」

「飛行機の基本的な動きというのが感覚的につかめなくて・・・」

「おまえ、飛行機に乗ったことがないの？」

「はい・・・黒岩さんはあるんですか？」

「もちろんあるよ。って乗ったことのない奴って珍しくないか？」

「そうでしょうか？ 自分は日本国民の大多数は乗ったことがないと思いますが・・・」

「そんな馬鹿な」

「自分なんて群馬の田舎から出てきたばかりですが、列車に乗ったのも初めてであります」

田中は頭をかいて、少し恥ずかしそうに笑った。

今時それは無いだろうと悟は思った。

しかし、この田中という男は見るからに純朴そうな青年で、いくら群馬の田舎の出身とはいえ、  
現代っ子とは思えないような印象だった。

ようやく訪れた夜の自由時間であるが、悟はさっきから何かが足りないと感じていた。

そしてすぐ気付いた。TVの音が全く聞こえないのだ。見回すと部屋にはTVが置いて無かった  
。

「田中、ここにはTVは無いのかな？」

「は？ 何ですか？」

「テ・レ・ビ」

「テレビ？ 何ですかそれは？」

「はい？ お前TVも知らないの？」

「申し訳ありません。自分は田舎者で・・・」

「いや、いくら田舎でもTVくらいあるだろ？ お前は一体いつの生まれなんだよ・・・」

「はい、自分は昭和2年の生まれであります」

「昭和2年か・・・えっ？ 昭和2年？ おいおい、ふざけるなよ！」

「ふざけてなんていません。自分は確かに昭和2年生まれですが」

「それじゃ今年は何年なんだよ？」

「今年は昭和19年であります。黒岩さんだっでご存知でしょう？」

「はあ？ 昭和・・・19年？」

これは一体どういうことなんだ？

悟は面食らって次の言葉が見つからなかった。

「あの・・・念のために聞くけど、西暦だと何年になるのかな？」

「いやだなあ、1944年じゃないですか」

「1944年・・・」

平成23年、西暦2011年から数えて67年前である。

「今年が昭和19年だっということが分かるようなものが・・・何か証拠になるような物って無  
いかな？」

「証拠？ はあ・・・証拠と言えるかどうか分かりませんが、教官室の前の廊下に我々のクラス  
の名簿が載った官報が貼ってありましたけど」

「カンポウ？ それに証拠が載ってるの？」

「昭和19年8月発行であることが書いてあると思いますよ。一応、国が発行した官報ですから  
」

悟は急いで教官室の前まで行って見た。

そこに貼ってあった官報には確かに日付が入っていた。

昭和19年8月15日発行。

クラスの名簿を見ると黒岩悟の名前もあった。

マジかよ・・・。

悟は教官室の前で呆然と立ち尽くしていた。

本当に今が昭和19年だとすると、この俺は何故ここにいるんだろう？

俺はもちろんのこと、俺の両親さえ生まれる前じゃないか。

俺は夢を見ているのか？

いや、これは夢なんかじゃない。

俺は確かにここに居る。

まさか・・・。

悟の脳裏に閃いた結論があった。

しかし、それは余りにも突拍子も無いこと。

だが、今となってはそれ以外の結論は見つけれなかった。

俺は・・・過去にタイムスリップしたんだ！

今朝、講堂で千葉大尉が言っていた戦争というのは第二次世界大戦のことだったのだ。

日本が世界を相手にして戦い、そして敗れ去った太平洋戦争の時代に悟は来てしまったのだ。

ここはもう平成23年の日本じゃないのか・・・俺は昭和19年の日本軍の軍人になったというのか。

とても信じられることではなかった。

しかし、全ての状況がその驚愕の事実を悟に突きつけていた。

エリカはベッドの上で壁にもたれて携帯電話のアドレス帳を開いてみた。

やっぱり消えてる。

悟の電話番号だけが消えていたのである。

もう1度、悟の電話番号を登録し直す。ため息がでた。

ふと、ベッドの下を見るとカーペットの上で麻衣が丸まって眠っている。

「まったく、しょうのない子ね・・・」

クスッと笑うと、そっと麻衣に毛布をかけてあげた。

エリカはなんだか麻衣が妹のように思っていた。

ひとりっ子のエリカは小さい頃から部屋では1人で過ごすことが当たり前だと思っていた。

だが、麻衣が来てからというもの、いつもエリカの後を付いて回って、まるで金魚のフンのようである。

そして、静かになったと思ったら子猫のように眠ってしまう。

エリカは麻衣のそばに座ると、眠っている麻衣の髪をやさしく撫でた。

「いい子ね・・・あなたが居るから私は生きていられるのかも・・・」

また涙が滲んだ。

麻衣と並んで学校への道を歩きながら、エリカは決意していた。それは、

レディースからの引退。

悟が居なくなった今、そこに行くことは辛い気持ちに追い討ちをかけるようなものである。

「麻衣、私ね、レディース辞めるわ」

「・・・・・・・・」

「これからは、あなたがリーダーよ」

「ううん、先輩が辞めるなら私も辞めます」

「私に付き合うことないわよ」

「麻衣、先輩が居ないレディースなんて興味ないもん・・・」

「そう・・・それじゃ今度の集会でみんなにお別れの挨拶しなきゃね」

「はい」

なんだか少し寂しい気もする。だが、いつかは来る日だったのだ。

本当は悟と一緒に引退したいと思っていた。

だが、それが叶わない今となっては仕方がない。

悟や仲間達と一緒に走った日のことが走馬灯のように思い出されてくる。

だが、もう考えるのは止めた。

自分のことを心配してくれる麻衣の為にも、表面上は明るく振舞おう。

エリカはそう思った。

悟が消えてから、もう2週間が過ぎようとしていた。

あのピンクの特攻服も押入れの一番奥に仕舞い込んだ。

このところ、部屋に居る時はいつも麻衣とじゃれ合って、まるで仲の良い姉妹のようだった。

「ねえ麻衣、私がネイル塗ってあげる」

「わあ！ ホントに？ お願いします。私、不器用だから、いつも先輩のネイル見て羨ましいと思ってたんです」

「ほら、ジッとしてなさいよ」

エリカは麻衣の嬉しそうな顔を見るのが好きだった。

「ねえ、先輩。爪が乾いたらお出かけしましょうよ。うんとお洒落して」

「よーし、あんたには負けないわよ。私の色気に付いて来れるかな？」

「麻衣だって、一番のお気に入りを着て、バッチリ可愛く変身しちゃうんだから」

「こらっ！ 動くなって言ってるでしょ？」

「ごめんなさい」

麻衣はさっきからお出かけ着を選ぶのに余念が無い。

「ねえ先輩、これどう思いますか？」

麻衣はスカートの裾をつまんでポーズを取ってみせた。

白の透かし柄のレースワンピースである。うっすらとインナーが見えて、なかなかセクシーな印象を与えている。

「あら、すごくイイじゃない。可愛いわよ」

「えへへ、先輩がそう言うなら私はこれにしよ。でも先輩も素敵！」

エリカは黒のシフォンワンピースである。胸周りにレースパネルが使われていて、胸の谷間が透

けて見えている。

「先輩、そろそろお出かけしましょうよ・・・」

「う、うん」

エリカはもう1着くらい試してから決めたかったのだが、そわそわしている麻衣を待たせるのも悪いので渋々同意した。

エリカの家を出たのは午後5時を過ぎていた。

街を歩いていると、そこここにたむろしている若者達の姿や、通り過ぎるオートバイ等を見かける度に、そこに悟の姿を探してしまい悲しい気分になるエリカであった。

麻衣も何だか辛そうな様子のエリカを見て、気の毒で仕方なかった。

「先輩・・・楽しいお店に行きましょうよ」

「そうね」

「友達から聞いたお店があるんです。今からそこに向かいまーす！」

エリカは、麻衣が自分を慰めるために無理してはしゃいで見せていることに気付いていた。

とにかく今日は麻衣にお任せで思いっきり楽しませてもらおうとエリカは思っていた。

やがて到着したその店はクラブ『アリーナ』であった。エリカも以前に悟と2人で来たことがあった。

「ここでーす！ それじゃ入りまーす！」

麻衣は少しおっかなビックリの様子で扉を押し開けた。彼女は初めての経験のようである。

まだ店が開いて間もない時間らしく、5人くらいの男性客が居るだけであった。

おどおどしている麻衣の腕を引いて、エリカ達はカウンター席の端に座った。

「いらっしゃいませ。何にいたしましょう？」

バーテンダーの渋い声に麻衣は完全に舞い上がってしまった。

「あ、あの、その」

「この子にはグレープジュースを、私にはジンジャーエールをお願い」

「かしこまりました」

エリカは麻衣にニッコリと微笑んで見せた。

「先輩、カッコイイ。慣れてるって感じ・・・」

「そんなことないわよ。所詮は飲食店なんだから緊張することないのよ」

「は、はい」

2人はしばらくの間、流れる音楽を聴きながらドリンクを楽しんだ。

そうしているうちにも客が1人、2人と増えてきた。

そして、男だけで来ているグループは、さっきからエリカと麻衣に興味深々の様子である。

エリカの好きなミュージックがかかった。

「麻衣、踊ろうよ！」

「は、はいっ！」

2人はアリーナのメインステージに進んだ。

エリカも麻衣も夢中で踊った。

汗が飛び散る。ライトが眩しい。そして体が音楽と完全に一体になった。

曲が次々に変わっていくが、エリカも麻衣も踊りまくった。

エリカ達に誘われるように、周りにはダンスをする客が少しずつ増えてきた。

そして、2人は次々と男達に声をかけられた。

「君ら2人で来たの？」

「俺達と一緒に楽しまないか？」

「イカしてるね。君ら大学生？」

「めっちゃダンスうまいじゃん！俺と一緒に踊らない？」

エリカはそんな男達を無視して踊り続けた。

「せんぱーい・・・私、ちょっと休憩します」

麻衣がエリカのそばを離れてカウンター席に戻った。それでもエリカは踊り続けた。

踊りながらも、麻衣のことをチラチラと見ていると、間もなく1人の男が麻衣の隣に座った。

嬉しそうな麻衣の横顔が見える。男が何かメモらしい物を麻衣に渡したのが見えた。

そして男はすぐに麻衣のそばを離れた。ニコニコと彼を見送る麻衣。小さく手を振っている。

エリカは微笑んだ。

「やるじゃん、麻衣。それでいいのよ・・・」

思いっきり踊った後の夜風は気持ち良かった。

「もうクタクタよ。でも久しぶりに楽しかった。ありがとう、麻衣」

「私、初めてだったけどクセになりそうです」

「男も見つかったし？」

「えっ！ 先輩、見てたんですか？」

「カッコイイ男だったじゃない。よかったね」

「まだ付き合うかどうか分からないですよ」

麻衣は顔を真っ赤にして俯いた。

「誰でも最初はそんなものよ。しっかりやりなさいよ。合宿もそろそろお仕舞いかな」

「やだー・・・麻衣、先輩と離れたくない！」

「うふふっ、そのうち私より彼氏の方が良くなるわよ。今のうちに自宅に戻っておいた方が良くない？」

「私、先輩のおうちからお嫁に行く・・・」

「まあ、この子ったら」

「何だか私ばかり楽しんじゃったみたい」

「そんなことないわ。私本当に楽しかったよ」

麻衣はエリカの腰に手を廻して寄り添ってきた。

エリカもそんな麻衣が愛おしくて、そっと肩を抱き寄せた。

「帰ろう」

「はい・・・」

昼休み。エリカは1人教室の窓辺に佇み、ぼんやりと校庭を見下ろしていた。

悟の影が全く見えない毎日が過ぎていく。

このままでは自分の中の記憶さえ薄れていくのではないかと思うと怖くて仕方なかった。

エリカが知っている同級生達は、悟とエリカの仲も当然知っていて、エリカの明るい性格も知っている筈であった。

だが、あの変化を境にして同級生達のエリカに対してのイメージにも違いが生じていた。

現在の同級生達の考えるエリカの印象とは『高校入学以来、ずっと彼氏をつくらない謎の美少女』であり『どこか近寄り難い雰囲気を持つ女』というものだった。

エリカがレディースに入っていたことは同級生には内緒にしていたが、もしかすると何か普通でない気配を感じていたのかもしれない。

しかし、あの変化以来、エリカの中からトゲトゲしさは消え失せ、時折見せるアンニュイな表情

が男子達を惹きつける魅力となっていた。

最近、男子達は何かにつけてエリカに接近をしてくるようになった。

なんとかしてエリカを自分の彼女にしようという魂胆が見え見えで、そんな男達にエリカは心底うんざりしていた。

しかし、悟と再び会える保障など何も無い。

そもそも悟の存在自体が世の中から否定されているのだから、エリカとしては複雑な心境だった

。

もしかして、私はとっくに気が狂っているんじゃないの？

悟なんて、元々この世には居なかったんじゃないの？

もしかしたら、全ては私の妄想？

私は存在もしていない人間の影に縛られて、このまま一生を棒にふるってしまおうとしているの？

ともすれば気が弱くなりがちで、ついついそんな風に考えてしまうエリカであった。

これは本当に嫌だった。

せめて自分だけは悟のことを信じてやらないと悟が可哀想だ。

そう自分に言い聞かせるエリカであった。

心の中で呟く。

「悟、何でもいいから私とコンタクトを取ってちょうだい・・・」

入隊から1週間、今日は外出許可日である。

悟は田中と一緒に隊を出ると列車に乗って近くの町まで出た。

運賃はなんと10銭。貨幣の単位まで違う。しかも鉄道車両は蒸気機関車である。

悟はただ戸惑うばかりだった。

そして町に着いて駅舎を出ると、そこには驚きの風景が広がっていた。

近代的な鉄筋コンクリートの建物など1つも無いし、全ての家が日本家屋である。しかも結構古い家が多かった。

また、町のメインストリートですら舗装はされていない。

往来している車の台数も非常に少ない。しかもそれらの車は見たこともないような旧式の車両である。メーカーさえも悟には分からなかった。

大八車を引いている人や農耕馬を連れている人もいる。

町行く人たちの身なりも悟の見慣れた平成ファッションとはかけ離れた姿であった。

国民服、割烹着にモンペや和服。女学生の着ている制服も時代がかっているようだった。

もっとも、悟自身がイガグリ頭に水兵服である。

ともあれ、悟も周りの風景に溶け込んでいたのだが、本人だけは面食らっていたのである。

軍人にとって、外出日というのは軍隊の厳しい規律から開放される楽しい日であるが、今の悟にとっては残酷な現実を再確認させられたただけであった。

隊内でいくら証拠となる物を見せられても、今ひとつ信じ切れなかったことが、町に出てみて疑いのない事実であることを確認させられてしまったのである。

まるで死刑宣告を受けたような気分だった。

この時代、もちろんエリカは生まれていない。

最愛のエリカと会う望みも絶たれてしまった。

そして、負けると分かっている戦争に自分も従軍しなければならないのである。

この1週間、戸惑いつつも興味ある飛行機操縦の勉強をしてきた。

しかし、いくら興味があるといっても、それは自分の中に核となる何かがあってこそ初めて夢中になれるのだ。

悟にとってはエリカこそが核であった。

そのエリカの存在を奪われた今となっては、悟の中の希望やモチベーションは急速に萎んでいったのである。

すっかり気落ちした悟は田中に聞いてみた。

「田中、お前は何のために航空兵を志願したんだい？」

「もちろん、お国のため・・・大切な人を守るためであります」

田中の表情が少し曇ったような気がした。

「お前の大切な人って誰だよ？」

「姉であります」

「2人だけの姉弟ってわけか？」

「いえ、自分の血を分けた兄弟は兄だけです。姉というのは兄のお嫁さんです」

「何？ 兄貴の嫁さんだと？ 何だかややこしいことになってそうだな」

「自分の兄は新婚間も無く兵隊に取られて、そのまま中国の戦場で戦死しました。たった1週間の新婚生活でした」

「兄貴が戦死した後、嫁さんは実家に帰らなかったのか？」

「自分の母親が病弱なので、そのままウチに残ってくれたんです。そして同じ屋根の下で暮らして1年、自分は・・・」

「義理の姉さんを愛してしまったって訳か」

「・・・・・・・・」

「だとしたら余計に志願するなんて変だろ？ どうして姉さんのそばに居てやらなかったんだ？ 戦争に行ったらお前だって戦死するかもしれないんだぞ」

「もし自分が死んでも姉だけは守りたいのであります」

「そんな・・・それじゃお前が報われないじゃないか」

「これが日本男児の本懐であります」

悟には理解に苦しむ話であった。もちろん大切な人を守りたいという気持ちは分かるが、自分が死んでしまっただけでは意味が無いではないか。

「お前の姉さんは、お前のその気持ちを知っているのか？」

「おそらく気付いていると思います」

「入隊前にプロポーズしたとか？」

「ま、まさか・・・そんなことはしません」

「じゃ、どうして気持ちが通じたって分かるんだよ」

「これです」

田中は懐から1枚の紙包みを取り出した。

その紙包みの表には毛筆で御守と書いてあった。

「何が入ってるんだ？」

「その・・・何と言うのか・・・どうも・・・」

「何だよ。はっきりしろよ。男らしくないぞ」

「あ、あ、あそこの毛であります！」

「あそこの毛？ もしかして姉さんのか？」

「はい、姉さんが出征直前に私にくれました」

「どういうこと？」

田中は真っ赤になりながらも、その当時の習慣を教えてくれた。

その当時、恋人が出征する時には御守として陰毛を1本包んで持たせるということが行われていたのである。

「へえー！ そんな洒落たことしてたの？」

「他の人には内緒にしてください・・・」

「大丈夫。俺は口が固いんだ。と言う事は姉さんもお前のことが好きだったってことか・・・この野郎！ 憎いよ、色男」

「勘弁してください」

悟は羨ましかった。自分にはエリカの分身となる物は何一つ無いのだ。

田中をからかいながらも悟の心の中は乾いていたのである。

翌日、いよいよ待ちに待った飛行機操縦の实地訓練が開始された。

一時は気落ちして何もやる気が起きなくなった悟であったが、自暴自棄になっても運命が好転することは無さそうだと気付き、この今を精一杯生きてみる決心をしていた。

そして訓練は1人の教官に2人ないし3人の練習生がつく形で順番にマンツーマンで特訓が行われた。

悟は最初からゼロ戦に乗れると思っていたが、出てきたのはゼロ戦とは似ても似つかぬ複葉（主翼が2枚ある旧式機）の練習機であった。もちろんジェット機ではない。プロペラ機である。

「なんだこれは？」

悟が得意とするフライトシミュレーターには登場しない飛行機である。ミサイルも機銃（マシンガン）も付いていない。

あまりのショボさに悟はがっかりしてしまった。

しかし、練習生の中で飛行機に乗った経験があるのは悟ただ1人である。しかも悟にはゲームセンターで鍛えた操縦技術がある。

たちまちのうちに悟は頭角を現し始めた。

通常であれば2ヶ月をかけて少しずつ高度な技を習得するのであるが、悟のあまりの上手さに教

官達は度胆を抜かれた。

そしてある日、悟は訓練後に教官室に呼び出された。

悟は教官室に入った。そこには悟の受け持ち教官と共に航空隊の司令官が待っていた。そして司令官は言った。

「黒岩、貴様の操縦能力は我々の予想をはるかに超えている。もうここで教えることは何もない。そこで、前例の無いことではあるが、貴様を繰り上げ卒業とし、九州の大村航空隊に派遣することとなった。しっかりやってもらいたい！」

大村航空隊というのは飛行学校ではない。本物の実施部隊である。

悟は司令官の命令を受けて早速転勤の準備に入った。

その夜のこと、

「黒岩さん・・・」

「おう、田中か」

「大村行きになったそうですね」

「ああ、一足先に行ってるよ。お前も後から追いかけてこい」

「せっかく仲良くなれたのに残念です・・・」

「俺もだよ。でもこれが今生の別れでもあるまいし、またどこかで会えるさ。それまでお互い元気でやろう！」

悟は転勤の準備が済むと霞ヶ浦航空隊での最後の床に就いた。

そして、夢の中である奇妙な出来事が起こったのである。

これからの悟の心の支えとなる出来事が。

悟は夢を見ていた。

晴れ渡った秋の青空の中を飛んでいる1機のゼロ戦がある。

そのコクピット（操縦席）にいるのは悟本人である。

「ずいぶん計器がいっぱい付いてるなあ」

目の前には各種のメーター類が沢山並んでいた。

練習機には簡単な計器が数個付いているだけだったが、本物の戦闘機には沢山の計器や装置が付いているのである。

「よし、このゼロ戦で宙返りしてやれ」

悟は目の前の操縦桿を引っ張った。

2度、3度、悟は宙返りを繰り返す。

「気持ちいい・・・」

ふと、飛行服のポケットに異物感を感じた。

ポケットに手を突っ込んで探してみると、出てきたのは悟愛用の携帯電話である。

「丁度いい、エリカに今のこの宙返りのことを話してやろう」

悟は早速アドレス帳を開くと、エリカを選択して電話をかけた。

その同じ時刻。

エリカは夢を見ていた。

今日も1日、麻衣と遊びまわって心地よく疲れている。

となりの麻衣に微笑みかける。

それに応えて麻衣も微笑んでエリカに抱きつく。

と、その時、エリカの携帯電話が鳴り出した。

この着信音は悟である。

エリカは当たり前のように電話に出た。

「ハーイ！ エリカ様だよー」

『俺だ。今、俺がどこにいるか分かるか？』

「まさか女の所に居るんじゃないでしょうね」

『アホッ！ そんな訳あるか』

「1人でオートバイに乗ってツーリング中？」

『残念でした。実は俺、今ゼロ戦に乗って大空を飛び回ってるんだぜ』

「ゼロセン？ 何それ。デブ専なら聞いたことあるけど、キャハハハッ」

『お前なあ・・・ゼロ戦だよ。飛行機』

「ああ・・・悟がよくやってるやつね。ってことは今ゲームセンターに居るのね。私もすぐ行く」

『いや、ゲームセンターじゃないよ。俺は今、霞ヶ浦の上空を本当に飛んでるんだぜ。俺、パイロットになったんだ』

「マジ？ カッコイイ。私も乗せてよ」

悟は夢中で話した。

「乗せてやりたいけど残念ながらゼロ戦は1人乗りなんだよ」

『悟のケチー・・・いつも悟の後ろは私の指定席じゃないのよ・・・』

エリカは急に悲しくなって泣き始めた。

「おい・・・泣くなよ。そうだ、今度またエッチしようぜ。たっぷり可愛がってやるよ」

『ウソ・・・最近全然会いに来てくれないじゃない。私、寂しいよ』

「俺だってエリカに会いたいよ。でも今は駄目なんだ。我慢してくれ」

『どうして会えないの？ 私のこと嫌いになったの？』

「そうじゃない。俺は明日、九州の大村航空隊に転勤するんだ」

『オオムラ？ 九州？』

「そうだ。うちの司令官が俺の腕を見込んで飛行学校を繰り上げ卒業させてくれたのさ」

『それじゃ、もう仕事を始めるのね。どんな仕事なの？』

「戦争だ」

『戦争？・・・そんなの駄目だよ・・・悟が死んじゃう！』

エリカはまた激しく泣き出した。

「おい、エリカ、エリカってば・・・」

その悟の声に麻衣の声が重なり合って聞こえだした。

「エリカ先輩！ エリカ先輩ってば！」

エリカは麻衣に揺り起こされて目覚めた。まだ夜明け前だった。

「悟・・・」

「先輩、どうしたんですか？ そんなに泣いて」

エリカの顔は涙でグシャグシャだった。そんなエリカを麻衣は心配そうに覗き込んでいた。

「夢・・・だったの？」

エリカは虚しさで胸が一杯になった。

「サトルさんの夢を見たんですね・・・先輩、夢でサトルさんに会えたんですね」

エリカはまだ夢だったことが信じられない思いだった。

まだ耳元に悟の声がしっかりと残っている。

「九州・・・オオムラ」

「えっ？ 何ですか？」

「悟は明日、九州のオオムラに転勤になるって言ってた・・・」

「サトルさんって社会人だったんですか？」

「戦争に行くって」

「戦争？・・・」

「オオムラってどこ？」

「私、地理弱くて・・・明日学校で調べたらどうですか？」

「そだね・・・」

エリカはベッドに横になった。麻衣がそばに付き添って見つめていた。

「大丈夫よ」

「おやすみなさい」

「おやすみ」

だが、エリカはもう一睡も出来なかった。

夜が明けると、エリカは普段より1時間も早く家を出て学校に向かった。

いつもと様子の違うエリカを心配して、麻衣も一緒に付いて来た。

学校に着くと2人は図書室に向かった。そして棚から地図を取り出すと九州のページを開いた。

「先輩、ここですよ。長崎県大村市。長崎空港があるんですね」

「空港・・・そういえば悟はパイロットになったって言ってたっけ」

「パイロット？　すごいじゃないですか！」

「麻衣はゼロセンって知ってる？　悟はそれに乗ってるんだって」

「昨夜、先輩はサトルさんが戦争に行くって言ってましたよね」

「そうらしいの・・・でもそんなの有り得ない」

「私、ゼロ戦のこと少しだけ知ってます。私の曾祖父が戦争中にゼロ戦で戦死してるんです」

「戦争中？　いつの戦争のこと？」

「第二次世界大戦です。もうずっと昔の話です」

「ゼロセンって、そんな昔の飛行機なの？」

「先輩、ちょっと待っててください」

麻衣は書棚から別の本を取り出してきた。

『太平洋戦争』

その本の表紙にはそう書かれていた。

麻衣はページをパラパラと捲っていたが、あるページで手を止めた。

「先輩、この写真がゼロ戦です」

麻衣が指し示した白黒写真は小型の飛行機が今まさに離陸しようとしているシーンを撮影したものだ。

「ゼロ戦・・・零式艦上戦闘機ですって。略して零戦（レイセン）。あっゼロ戦って戦後の呼び名ですって」

「昭和15年正式採用、終戦の昭和20年まで使われていた・・・麻衣、これが悟の言ってたゼロ戦なの？」

「間違いないです。私、曾祖母から何度もこの写真を見せられました」

「終戦後に全て廃棄処分されたって書いてある。それじゃ悟が乗ってるゼロ戦って何なの？」

「もしもサトルさんがゼロ戦に乗っているとしたら・・・サトルさんは過去の時代に居ることになりませんか？」

「過去！？」

「まさか・・・サトルさんは神隠しに遭って過去にタイムスリップしたんじゃないですか？」

「そんな馬鹿な・・・」

だが麻衣の話をも馬鹿げたことと一笑に付すことは出来なかった。

ゼロセン、オオムラ、どちらの単語もエリカにとっては初耳だったのだ。

それが突然夢の中に出てきたということは、

「これって、悟からのメッセージかも・・・」

エリカの中で、その思いつきが次第に確信へと変っていった。

大村航空隊に着任した悟は土日も無しの猛訓練に明け暮れていた。

当時、その休み無しの勤務体制のことを月月火水木金金などと言っていたのである。

そして悟の搭乗機は待ちに待ったゼロ戦に代わっていた。

毎日毎日、先輩搭乗員との模擬空戦や編隊飛行、空中射撃訓練などが行われた。

最初のうちは先輩達に手もなく捻られていた悟であったが、ここでも驚くほどの上達振りを見せて先輩達の舌を巻かせていた。

「おい、黒岩。貴様は天才かもしれんな」

「木村二飛曹（二等飛行兵曹、日本海軍の階級名の1つ）、次こそは負けませんかからね」

「ホントに黒岩には負けそうだよ・・・そうだ、そろそろ貴様にも日本海軍戦闘機隊の秘伝を授けてやらないとな」

「秘伝ですか？」

「そうだ。左ひねり込みという技だ。これさえ習得すれば絶対敵に負けることはないぞ」

「木村二飛曹、ぜひ教えて下さい！」

「よし、それじゃ一緒に来い」

搭乗員待機所に戻ると先輩木村は2つの模型飛行機を手にして秘伝『左ひねり込み』のやり方を説明した。

悟はオートバイでも何でも、高等テクニックをマスターすることには異常なほど熱中するタイプだった。

この日も説明を終えた木村にしつこいくらいに質問を繰り返した。その熱心さには木村も呆れるほどであったが、徹底的に教え込んでくれた。

「よし黒岩、明日の模擬空戦で実際に試してみよう」

「はい、よろしくお願いします」

翌日、早速悟は先輩木村と2機で大空に舞い上がった。

悟は先行する木村機をピッタリと追尾するような形になった。

すると木村機は機種を下げてスピードをつけたと見るや、そのまま上昇に転じて宙返りに入った。

そして悟も木村機に続いて宙返りに入った。

だが、その宙返りの頂点あたりで木村機の機体がフラフラと揺れたと思ったら、突然悟の目前から見え失せてしまった。

「何？ 木村先輩、どこに行ったんだ？」

悟は狐につままれたような気分だった。

気がつくとも木村機は悟の後ろにピッタリとついていて。

空中戦では敵の真後ろについた方が絶対有利である。そのまま機銃を発射して相手を撃墜できるからだ。

今の木村の技『左ひねり込み』によって、一瞬のうちに彼我の体制が逆転したのである。

「うそだろ？ 何だ今のは？」

先輩木村のお手本を目の当たりにして、悟は必死に冷静に戻ろうとしていた。

昨日、木村から教えてもらった手順を思い出す。

「よし、先輩、今後は俺の番だ！」

先程の木村と同じように宙返りに入った悟は、その頂点付近で昨日教わったとおりの操作をした。

しかし、結果は惨憺たるものだった。

その日、木村機を相手に何度も何度も繰り返して左ひねり込みの練習を行ったが、結局悟には出来なかった。

飛行場に戻って地上に降り立つと木村がニヤニヤしながら悟に近づいて来た。

「どうだ？ 黒岩」

「先輩、どうして俺には出来ないんですか？」

「この技はそう簡単に覚えられるものではないのだ。一步間違えば自分が墜落してしまうような際どい技なんだ。もっともっと研究するんだな」

「・・・・・・・・」

悟は悔しかった。先輩が簡単そうに繰り返す技が自分には出来ない。

だが、これが出来ないと敵に勝つことは出来ないのだ。

それからの悟は寝ても覚めてもこの左ひねり込みのことを考え続けた。

そんなある夜、悟はベッドに横になって眠りにつくまでの間も左ひねり込みのことを考えていた。

あそこでああして、それからこうして……。

考え込んでいるうちに、昼間のハードな訓練の疲れから、いつの間にか悟は眠りに落ちていった。

ちょうど同じ時間。

エリカは夢を見ていた。

こうして夢を見ることをずっと待っていた。

夢さえ見られれば、また悟からメッセージが届くに違いない。エリカはそう期待していたのだ。

夢の中でエリカは携帯電話を前にして悟からの着信があるのをひたすら待っていた。

やがて、携帯電話のイルミネーションが輝き出し悟からの着信音が鳴り出した。

エリカは震える手で通話ボタンを押した。

「もしもし？ 悟？」

『俺だ。元気だった？』

「どこにいるの？」

『大村だ』

「悟、まさか日本軍のパイロットになったの？」

『どうしてそれを？』

「私、あれから必死に調べたのよ。お願い、ゼロ戦に乗るのはもう止めてちょうだい！」

『どうして？』

「日本はその戦争に負けるのよ・・・」

『知ってるさ。歴史の授業で習ったもんな』

「悟が居るのは昭和何年なの？」

『昭和19年だ』

「19年・・・それじゃもうすぐ・・・始まってしまう・・・」

『えっ？ 何だって？ 何が始まるって？』

「神風・・・<ザザザッ>・・・<ザーッ>・・・」

『エリカ、よく聞こえないよ。雑音が多くて』

「もうすぐ神風特攻隊が始まるのよ！ ゼロ戦に乗ってたら悟も特攻隊に行かされ・・・<ザザザッ>・・・だからお願い、今すぐゼロ戦から降りて！」

『何？ 聞こえないよ。今何て言ったんだ？ おい、エリ・・・<プツン>』

「もしもし？ もしもし？ 悟？ 悟！」

悟は目を覚ました。夜中だった。

またエリカの夢を見ちまったな・・・。

エリカの奴、俺にゼロ戦を降りろなんて。

この状況で勝手に降りられる筈がないよ。

俺は軍人になったんだから、命令とあれば危険な任務にだって就かなければならないんだ。

やっぱり女には分からないよな。

俺、エリカに心配ばかりかけてるよな。  
だけど・・・エリカに会いたい。  
あれからエリカはどうしているんだろう。  
俺が急に居なくなって寂しがっているだろうな。

那威賭（ナイト）はどうなったかな？  
今にして思えば、俺ってガキだったな。  
自分のことしか考えてなかった。  
自分勝手に生きてきたからバチが当たったのかもしれないな。

悟は自嘲気味に笑った。

また明日も訓練があるから、もう寝なきゃ。

翌日、また悟は木村と空に上がった。  
早速左ひねり込みの練習を開始する。しかし、1度目も2度目も失敗だった。  
さすがに悟は気落ちしてしまった。だが木村の方を見ると手先信号でもう1度やってみろと告げている。  
仕方なく悟は宙返りに入った。どうせまた駄目だろうと半分諦め気味に操作を開始した。すこしタイミングがズレた。その瞬間だった。

「あ、ああー、何だこの浮遊感は・・・」

悟の機は木村機よりずっと旋回半径が小さくなって、木村機が悟の前にヒヨロヒヨロっとのめり出してきた。

「や、やった・・・やったぞー！ 左ひねり込みが出来たぞー！」

水平飛行に移って、悟は木村機の左横につけて木村二飛曹を見た。  
風防越しに木村先輩は悟を見てニコニコしながら左手でガッツポーズをして称えてくれた。  
とうとう悟は秘伝の左ひねり込みに成功したのである。  
その後も数回やってみたが、もう何度やっても確実に成功することができた。  
飛行場に戻ると悟は木村二飛曹の所へ飛んで行った。

「先輩！ 俺・・・」

「やったな黒岩。見事だったぞ。これで貴様も一人前の戦闘機搭乗員だ」

「ありがとうございました、先輩！」

悟は言い様もない満足感を覚えていた。

そして昼休み。

エリカと麻衣は社会科教員である大田を職員室に訪ねた。

「私、3年の長井エリカといいます。先生、太平洋戦争について教えて欲しいのですが」

「ん？ 太平洋戦争？ ほう・・・君らのような女の子が興味を持つなんて珍しいな」

「2年の伊藤麻衣です。私の曾祖父はゼロ戦に乗ってたんです」

「へえ。ご親族に体験者が居るのか」

「でも戦死しちゃいましたけど」

「それはお気の毒だったね。しかし、この時代には大勢の方が同じように戦死されたんだよ」

「昭和19年の秋には神風特攻隊が始まったそうですけど、どういう基準で隊員を決めたんでしょうか？」

「建前では志願者ということになっていたが、現実には命令に近かったらしいね。特にパイロットになって間もない者が選ばれることが多かったようだよ」

「え？ 初心者マークのパイロットが優先的に選ばれたんですか？」

エリカの顔色が真っ青になった。

「そう。つまり敵と一騎打ちをする腕の無い初心者パイロットに突撃させたんだよ。機体に爆弾を括り付けて、そのまま敵の戦艦や空母に体当たりさせたんだ。人間爆弾だよ」  
麻衣が涙くんだ。

「そんなの酷いよ」

「それだけ日本軍は追い詰められていたんだ」

大田先生は机の上に積み上げた参考書の中から1冊取り出してエリカ達の前に広げた。

「ほら、この年表を見てください。昭和19年には日本軍は明らかに劣勢になっているだろう？  
次々に占領地を失っているよ」

「先生、九州はまだ大丈夫だったんですか？」

「九州？ うん、まだ内地は無事だ。だが、この頃の九州の航空基地に居た連中は特攻隊の予備軍のようなものだから気が気じゃなかっただろう」

「・・・・・・・・」

「先輩・・・」

「どうした？ 長井、大丈夫か？」

「何故、特攻隊なんてものが出来たんですか？ どうして死ななければならなかったんですか？」

」

エリカの両頬を涙が流れていた。

「長井・・・特攻隊の隊員達は日本国民を守るために自分の命を犠牲にしたんだ。大切な人を守るために」

「そんなことしないで早く降参すれば良かったじゃないですか」

「そうだな。だが、あの頃の人たちは日本が占領されたら、連合軍の兵隊達に酷い目に遭わされると考えていたんだ」

「酷い目？」

「今でも時々、沖縄の米軍基地周辺で女性が乱暴される事件が起きるだろう？ そういう弱い人達が占領軍の好きなようにされないため、どうしても降参することは出来なかったんだよ」

「でも、悟がその犠牲になることないじゃない」

「ん？ サトル？ 誰だそれは？」

「い、いえ・・・いいんです。すみません」

「俺はそろそろ次の授業に行かないと・・・だがいつでも話を聞きに来ていいぞ」

大田先生は職員室を出て行った。

エリカは麻衣に支えられるようにして職員室を後にした。

「先輩・・・大丈夫ですか？ 顔色が悪いです」

「もし、日本がもっと酷い負け方をして、もっともっと大勢の人達が死んでいたら、私も生まれてなかったかもしれないよね・・・」

「そんなこと、考えたこともなかったです」

「今は平成23年なんだから、悟が特攻隊に行ったかどうか、どこかで調べれば分かるんじゃないのかな？」

「でも、どこで調べるんですか？」

「分からない・・・」

調べれば分かる。そうってはみたものの、もし特攻戦死者の名簿の中に悟の名前があったら、その瞬間に微かな希望さえも消えてしまう。

エリカにはそんな勇気は持てそうもなかった。

外出日、悟は木村二飛曹に誘われた。

「黒岩、今夜は俺と一杯やらんか？」

「はい、喜んで」

「だが、その前に海軍病院に行く。貴様も付き合うか？」

「お供します」

隊を出ると、2人は連れ立って長崎にある海軍病院に向かった。

ある病室を訪ねる。

「おお！ 木村！」

「坂本！ 意外と元気そうじゃないか！」

2人は霞ヶ浦で同期生だったのである。

坂本二飛曹はラバウル航空隊所属の戦闘機搭乗員であったが、負傷のため日本に送り返され、この海軍病院に入院していたのだ。

見ると、坂本二飛曹は左手首から先が無かった。

「黒岩、この坂本はな、ラバウルで23機もの敵機を撃墜した猛者だ」

「はじめまして、黒岩二飛兵（二等飛行兵、日本海軍の階級名の1つ）です。木村二飛曹にはいつもお世話になっております」

「坂本だ。こんな格好をお見せするのは恥ずかしい限りだが、よろしく頼む」

「で、どうなんだ坂本、貴様はこれからどうするんだ？」

「傷が治ったら退役（軍を辞める）することが決まった」

坂本二飛曹は寂しそうに笑った。

「貴様の仇は俺がきっと討ってやるからな」

「そう気負わなくてくれ。俺は運が無かったんだ」

「だが、生きて故国の土を踏めたんだから、運が悪いとも言い切れんぞ」

「ああ、確かにそうかもしれんな。ラバウルの同僚達は次から次と戦死していったからな」

坂本二飛曹は遠い目をして何かを思い出しているようだった。

「黒岩君といったな。貴様はまだ実戦の経験は無いのだろう？」

「はい、飛行学校を出たばかりであります」

「戦場に出ることになったら無茶をするなよ。死んだら何にもならん。生きてお国のために働くんだ。分かるな」

「は、はい・・・」

「この黒岩は俺達が驚くほどの腕前なんだ。みんなで楽しみにして育てている新人なんだよ」

「そうか、そいつは俺も楽しみだ・・・しかし」

「何だよ、坂本」

「良くない噂を耳にしたんだ」

「噂？」

「どうも上の方では決死隊ならぬ必死隊を組織しようとしているらしい」

「必死隊？」

「万に1つも生還の望みがない特別攻撃隊だ！」

「なんだと・・・」

木村二飛曹の顔が沈痛な面持ちとなった。

「やはりな・・・いつかはそんなことになるんじゃないかと思っていた」

「この若い新人のような搭乗員をそんな攻撃に使われたんでは堪らん」

「我が航空隊は根絶やしにされてしまう」

悟は最初、2人の話している内容が理解できなかった。しかし、突然ピンときた。

特別攻撃隊だって？

それって特攻隊か？

神風特攻隊ってやつか？

信じられなかった。昔話としか思っていなかった神風特攻隊が始まろうとしているのだ。

暴走族でイキがって特攻隊長を気取っていた悟だったが、今度は本物の特攻隊に入れられる可能性が出てきたのだ。

敵に体当たりして粉々に砕け散る。想像しただけで体が震えた。

悟は青ざめた顔で呆然とその場に立ち尽くしていた。

「黒岩、大丈夫か？」

「は、はい・・・」

「なに、そんなに心配するな。まだ決まった訳ではあるまい」

「そうだと、貴様は優秀らしいから大丈夫だ」

坂本や木村のそんな慰めも悟の心を癒してはくれなかった。

なにしろ、未来から来た悟は彼らが知らないこの戦争の末路を知っているのだ。  
坂本二飛曹の病室を後にして廊下を歩いていると大勢の傷病兵と出くわした。  
片腕や片足が無い人はもちろん、廃人同然になってしまった兵隊も幾人も目撃した。  
これが皇軍を名乗っている日本軍の真の姿なのかもしれない。  
大量の兵隊を犠牲にして負け戦を戦い続ける日本軍の断末魔の姿のように思えて悟は身震いした。  
。

翌日、悟の隊に驚くべきニュースが飛び込んできた。

『10月25日神風特別攻撃隊の敷島隊が敵の護衛空母セント・ローに突入、これを撃沈した』

とうとう始まってしまったのである。

上層部の士官達は喜んでしたが、搭乗員室の悟達は皆、沈痛な面持ちで押し黙っていた。

次に出撃する部隊はどこなのか？

いずれは自分達の隊にもお呼びがかかるだろう。

そうなれば自分の運命も決まることになる。

いや、もう決まっているだろう。

そして、悟の部隊にフィリピン進出の命令が下った。

いよいよ戦地に向かうのである。

悟の部隊は、フィリピンのマバラカット基地に進出した。

悟にとっては初めての海外である。澄み渡った蒼空、グリーンがかった青の美しい海。そして温暖な気候。

もし観光で訪れたのであれば、この美しい国を存分に満喫することも出来たであろう。

エリカにも、この美しい風景を見せてやりたいと思う。

しかし、ここはもう戦場なのである。しかも神風特攻隊の基地なのだ。

悟は東飛行場に出た。数日前に、特攻第1号の関大尉ら敷島隊が飛び立っていった飛行場である。

関大尉は奥さんがいたと聞いている。しかも新婚だったらしい。

誰も居ない飛行場で、悟は亡き関大尉に向かって話しかけた。

「関大尉、あなたはどんなお気持ちで出撃されたのですか？」

「後に残した奥さんのことが心配ではありませんでしたか？」

「どうやってご自分のお気持ちを整理なされたのですか？」

「死ぬって、どんな気持ちですか？」

「敵に体当たりする瞬間は怖くありませんでしたか？」

「軍神になられた今、何をお考えですか？」

「我々が大尉の後に続くことをお望みですか？」

悟の疑問は尽きることがなかった。

しかし、明快な解答は得られる筈もなかった。

その夜、悟は久しぶりで夢を見ていた。

エリカに知らせてやらなければ。

悟は携帯電話を手に取りエリカの番号を押した。

プルルルー、ガチャ！

エリカはすぐに出た。

『もしもし、悟？』

「ああ、俺だ」

『どうして連絡をくれなかったのよ、私、心配で心配で・・・』

「俺は今、フィリピンに居るんだ」

『フィリピン？ まさかマバラカットじゃないでしょうね？』

「お前、何でそんなことまで知ってるんだ？」

『どうして？ まだ特攻隊は始まってない筈なのに・・・』

「お前・・・そんなことまで知ってるのか？ 先日、関大尉の敷島隊が初の特攻を成功させた」

『えっ？ それっていつの話なの？』

「10月25日」

『それじゃ、今は何日なの？』

「11月2日だ」

『うそ・・・』

エリカは夢の中で悟と話し続けた。

「今日は10月2日じゃないの？」

『何を言ってるんだ。お前カレンダーを見間違えているんじゃないか？』

「こっちは10月2日なのに・・・」

悟が過去に飛ばされた時に現代と約1ヶ月の差が生じていたのである。

「悟の今の任務は？」

『攻撃隊の護衛だ』

「攻撃隊ではないのね」

『ああ、俺なら大丈夫だから心配するな』

「気をつけてね。無茶をしないでね。お願いだから無事に帰って来てね」

『気をつけるよ。エリカの方は大丈夫か？』

「こっちは平和だよ。悟が居なくなった以外は何も変化がないの」

『男は出来たか？』

「バカッ！ 私には悟しか居ないよ・・・」

『強がり言っていないで早く他の男を見つけた方がいいんじゃないのか？』

「そんなの絶対に嫌！」

『ハハハ、まあいいさ。でも覚えておいてくれ。お前達未来の日本人を守るために、俺達は今、必死で戦っていることを』

「分かってる・・・」

『それじゃ、またな！』

「あっ！ 悟！ ちょっと待って！ 悟！ 悟ったら！」

電話は切れていた。

翌朝、エリカは社会科の大田先生を訪ねた。

「おう、長井だったな。よく来たな」

「先生、また特攻隊のことを教えてください」

「ああいいよ。しかし本当に珍しい子だな。今時そんな話に興味を持つなんて」

「特攻隊には護衛が居たんですか？」

「いたよ。特攻隊を無事に攻撃地点まで連れて行く役目だ。それともう1つの役目は・・・」

「もう1つの役目？」

「戦果の確認だ。同僚の特攻隊員がどんな戦果をあげたか、どんな死に方をしたかをしっかりと見届ける、悲しい役目だ」

「護衛の人は死なずに済んだんですね？」

「いや、そんなことはないぞ。特攻隊を途中の敵から守るためには相当無理な空戦もやったらしいからな。中には攻撃してきた敵機に体当たりした奴もいたらしいぞ。もちろん相討ちだがな」

「そんな・・・どうしてそこまで」

「特攻隊には指1本触れさせないという気概だろうな。死にに行く彼らに対しての精一杯の思いやりだろう」

「自分も死ぬかもしれないのに？」

「そうだ。それに今回は特攻隊に選ばれなくても次には選ばれるかもしれない。そう思えば他人事ではないんだらうな」

「えっ？ 護衛も特攻隊になるんですか？」

「戦争も最後の方になると何でもかんでも特攻だったらしいからな。護衛の隊員だって同じだよ」

教室に戻ったエリカは自席で呆然としていた。

昨夜の夢で、悟が護衛に回ったと聞いて少し安心していたのに、それは儚い期待であった。

自分の周りの同級生達を見回すと、誰もが脳天気にごろごろしている。

漫画やTVやエロ話。

これが現代の18歳男子の普通の姿だ。

それなのに、たった67年前の若者達は、国を守るために自分の命さえいとわずに戦っていた。

そして、その中には最愛の悟も居るのだ。

エリカは絶望に打ちひしがれていた。そんな時、

「ちょっとお邪魔していいかな？」

突然エリカの前に男子が顔をのぞかせた。

「なに？」

「ちょっと話があるんだけど、そこまで付き合ってくれない？」

クラスの女子の人気の的である青木拓郎だった。  
長身にサラサラの長い髪が自慢のプレイボーイである。

「用があるならここで話してくれない？」

「ここじゃ話せないから言ってるんだよ。そんなに時間は取らせないからさ、いいだろ？」

仕方なくエリカは席を立った。

クラスの女子達の羨望と嫉妬の目に見送られながら、エリカは青木の後に従って歩いた。  
青木は誰も居ない体育館にエリカを連れ込んだ。

「青木君、用って？」

「長井ってさ、近頃変わったよな？」

「えっ？」

「何て言うか・・・つまりイイ女になったよ」

「何が言いたいの？」

「何がって、分かるだろうが」

「分かりません」

「俺と付き合えよ」

「は？」

「どうも俺の周りを囲んでる女共には飽き飽きしちゃっててさ。俺になびかない長井に興味湧いてきたんだよ」

「・・・・・・・・」

「俺がお前をもっと磨いてやるよ。大人の関係も教えてやる」

「何言ってるの？」

「お前の心も体も俺が満足させてやるって言ってんだよ。だから俺と付き合え」

エリカは呆れた。

「最低な男だね」

エリカは青木を置いて出口に歩き出した。

すると青木はエリカの腕を掴んで引き寄せた。

その瞬間、エリカは体をかわすと同時に青木の腹に強烈な膝蹴りをくらわせた。

「んぐっ！」

青木はだらしなくその場にひっくり返った。

「あんたみたいな甘ちゃんと付き合うつもりはないよ！」

「うう、長井・・・」

「どうして今の男ってこんなに最低なの？ チャラチャラしてるばかりで・・・自分のことしか考えてない・・・あんたは人のために命を捨てようなんて考えたことも無いでしょうね！」

エリカは後ろも振り向かずに体育館を出た。

悟、どうして私をこんな情けない時代に置き去りにしたの？

男の価値が外面では計れないものであることにエリカはとっくに気がついていたのである。

だからこそ、あの時代の男達の生き方、死に様に染まりつつある悟のことが心配で、不安で仕方がなかった。

悟は内地からやってきた第2陣を出迎えていた。

すると船から懐かしい顔が降りてきた。霞ヶ浦で同期だった田中浩次だ。

しかも、当時の隊長だった千葉大尉もいる。

悟は嬉しくなって2人のところへ飛んで行った。

「田中！ 千葉隊長！ お久しぶりです、黒岩です！」

「黒岩さん・・・」

「おお、黒岩か。元気でやっていたか？」

「はい、おかげさまで元気でやっております」

「護衛の任務に付いたそうだな。近いうちに世話になるかもしれん」

「えっ？」

千葉大尉は少し寂しそうな笑顔を見せた。そして田中は青ざめた顔で俯いた。

「黒岩、話したいことは山ほどあるが、我々の部隊は貴様達と一緒に居ることはできんのだ。だが貴様は命を粗末にするなよ。最後の最後まで諦めずに生きろよ！」

悟はその瞬間に全てを理解した。そして直立不動の姿勢を取るや、千葉大尉と田中に向かって敬礼をした。

千葉大尉と田中は返礼をすると、そこから無言で立ち去って行った。

間もなく、その日がやってきた。

飛行場の指揮所前に整列した特攻隊員達。

本日の隊長は千葉大尉。その列機には田中の姿があった。

悟は護衛として特攻隊を送る配置についていた。

司令官の訓示が終わり、特攻隊員たちは水盃で別れの乾杯をしている。

悟は一足先に自分の愛機に乗り込み、操縦席からその様子を見ていた。

悟は自分の声も聞こえないほどのエンジン音の中で1人呟き続けた。

「千葉大尉、あなたには婚約者が居ると聞きました。それでも行くのですか？」

「田中、姉さんはどうなるんだよ。お前は最愛の姉さんを置いて逝ってしまうつもりか？」

「どうして、あの2人が特攻に行かなければならないんだ。2人とも愛する人が待っているというのに」

悟はやり切れない気持ちだった。

だが、そんな悟の気持ちを置き去りにして、特攻隊員たちは1人、また1人と爆弾を括り付けた特攻ゼロ戦に乗り込んでいった。

特攻機が1機、また1機と離陸していく。全特攻機が離陸が終わると、次は悟達の護衛機が離陸である。

悟は愛機を操って滑走を開始し、間も無く地面を蹴って大空に舞い上がった。

互いに編隊を組みながら飛行を続ける。悟の編隊は特攻機編隊の右前に位置して飛んでいた。

悟は左後ろを振り返ってみた。

特攻隊長の千葉大尉が悟の視線に気付いた。田中もこちらを見ている。

特攻機は無線が使えないので、悟は手先信号で千葉大尉と田中に向かって意思を伝えた。

『あなた達は俺達が必ず守る。頑張ってくれ』

千葉大尉も田中も了解の手先信号を返してきた。

悟は胸が熱くなった。知らず知らずに頬を涙がつたい落ちる。

「こんな若い彼らが、これから命を捨てようとしている。敵艦に体当たりをしようとしている。こんな酷いことがあっていいのか・・・」

そんな悟の気持ちとは裏腹に編隊は順調に目的地に向かって飛行を続けていた。

やがて目的地の上空に差し掛かった。眼下の海上には敵の船団が白波を蹴立てて進んでいるのが見える。

早くも敵の対空砲火が我らの編隊の近くで爆発し始めた。

悟は必ず来るであろう敵の迎撃機に備えて四方八方を見張っていた。その時、太陽の方向から敵機が降ってきた。

「くそっ！ 特攻機には指1本だって触れさせないぞ！」

悟は操縦桿を引き付けて急上昇を開始した。機銃も撃ちっぱなしである。

他の護衛機も思い思いに敵機に向かって攻撃を開始した。

悟は1機の撃墜に成功した。そして2機目を追いかけてやろうとしていた時、それまで水平飛行していた特攻隊が下降姿勢に変わった。突撃するのだ。

悟は慌てて攻撃隊の方を見た。千葉隊長も田中もガッツポーズをしている。そして・・・白い歯を見せて笑っている。

笑って死んでいく。何という豪胆さ・・・。

悟はその特攻機の行方を見送った。

激しい対空砲火の嵐をかいくぐるように船に向かって突っ込んで行く。

「あっ！ 火を噴いた」

千葉隊長機の右翼が敵弾を受けて火を噴き出したのである。しかし隊長はまっしぐらに敵艦に突っ込んで行った。

そして、隊長と田中は横並びになって敵の戦艦のど真ん中に激突した。

特攻機の爆弾によって大爆発が起きる。そしてその爆発が船の燃料や弾薬に燃え移って、さらなる大爆発が起きた。

爆発の閃光が止むと、もう大きな戦艦は海の藻屑と消えていた。

その頃。

エリカは日に日に気持ちが沈み込んでいった。

もう2ヶ月以上も悟に会っていないのだ。

夢の中の悟との会話だって数週間に1度あるか無いかである。

しかも、その悟を待ち受ける運命は・・・。

考えたくもなかった。しかし、1日のほとんどは悟のことを考えずにはいられなかった。

悟、今あなたは何をしているの？

無事でいるの？

たまには私のこと、考えてくれている？

またいつか会えるよね？

私、ずっと待ってる。

待ってるから・・・。

ただ悟と再会できることだけを毎日祈り続けるエリカだった。

そして、エリカの体には少しずつ変化が現れ始めていた。

戦況は日に日に悪化の一途を辿っていた。

内地からは特攻隊員として飛行学校を卒業したばかりの新米搭乗員が続々と送り込まれていた。

しかし、その搭乗員の多くは経験不足で出撃するのには無理があった。

そんなある日、悟達は指揮所に集合を命じられたのである。

司令官は皆を見回しながら苦しげに話を始めた。

「諸君も知っての通り、我々の攻撃は大いなる戦果をあげている。ここは間髪を入れずに敵を叩かなければならない。しかし、内地から来る新米搭乗員達は全く使い物にならん。そこでだ・・・」

司令官は再び皆を見回してから言い放った。

「貴様達の中から特攻の志願者を募ることとなった。もちろん家庭の事情もあるだろう。そこで辞退する者は後で司令室に来るように。解散！」

一応、形だけは志願者ということになる。

しかし、辞退を申し出る者など1人も出ないであろう。

そういう時代なのだ。先に逝った戦友や祖国に残してきた大切な人のことを考えると、我こそが肉弾となって敵をやっつけてやるのだという決意が全員にみなぎっていたのである。

翌日の夕方、指揮所の前の黒板に明日の特攻出撃に参加する隊員の名前が書き出された。

そして、そこには2小隊3番機として悟の名前もあった。

「黒岩、とうとう行くことになったな・・・」

「木村先輩・・・」

「明日は俺が護衛を務めることになった。必ず貴様達を無事に送り届けてやる。俺の命に代えてもな」

「明日はよろしく願います・・・」

もうそれ以上の言葉は無用だった。

お互いに気持ちは分かり過ぎるくらいに分かっているのだ。

木村先輩は自分より先に愛弟子の悟を死地に赴かせることに強い憤りを覚えている。

だが、命令が下った以上は仕方がないのだ。

悟にとって、今夜はこの世で最後の夜になる。

エリカに報告できるのだろうか？

もし報告できたとして、一体何と言ったら良いのだろうか？

エリカの悲しむ顔が浮かんだ。

一番悲しませたくない最愛のエリカ。

だが、もう後戻りは出来なかった。

悟は結局一睡も出来ずに運命の朝を迎えた。

いつもの出撃と同じように指揮所に向かう。

しかし、今日はもう帰ってはこれない出撃なのである。

悟の心の中は大きく乱れていた。まだまだやり残したことが沢山ある。エリカに別れを告げることも叶わなかった。

だが司令の訓示を受け、一緒に出撃する仲間達と水盃を交わすうちに、悟の中に観念のようなものが広がっていった。

もう全てを諦めるしかないのだ。生への執着も、エリカへの愛情も。

悟は整備員の手を借りて操縦席に乗り込んだ。

静かに出発の時を待つ。

やがて、指揮官の手が上がり、攻撃隊は離陸を開始した。

悟も1番機、2番機に続いて滑走を開始するためにスロットルレバーを開いた。

空中を行く9機の特別攻撃隊。その中で悟も自分の定位置を守って飛び続けた。

悟のすぐ右横には、護衛の木村二飛曹がつけていた。

離陸前にあれほど悩み苦しんだ悟であったが、今はその雑念も晴れて、何だか清清しささえ感じていた。

木村先輩にも時々笑顔を見せてやる余裕も出てきた。

「先輩、見ててくださいよ。俺は見事に敵の空母を轟沈してやりますよ」

聞こえる筈もないが、悟は木村に話しかけた。

その時、悟はふと飛行服のポケットに違和感を感じた。

ポケットに手を突っ込んで探してみると携帯電話であった。

「うそ？ ホントにこんな物があったの？」

夢の中で何度も使った携帯電話が、今突然目の前に現れたのだ。

この時代、もちろん携帯電話などある筈がない。

かけたところで通じる筈もない。

しかし、悟はアドレス帳を開くとエリカの番号を押してみずには居られなかった。

抜けるように蒼い空。まぶしく輝き続ける太陽。そして・・・。

エリカは3時限目の授業を受けていた。しかし、身が入る筈もなく、ぼんやりと上の空である。その時、携帯電話が着信した。液晶パネルに表示されたのは、

「悟！？」

エリカは思わず叫んだ。

「おい、長井、どうしたんだ？」

その教師の声も無視してエリカは携帯を掴むと急いで教室を飛び出した。そして震える手で通話ボタンを押す。

「もしもし？ 悟？」

『エリカ、俺だ』

「夢じゃない・・・」

『ああ、夢じゃない。俺達は今こうして本当に話してるんだ』

「嬉しい・・・戻って来たのね」

『いや・・・』

「えっ？ 違うの？ 今どこに居るの？」

『今は・・・』

悟には、もうエンジン音も風切音も聞こえなかった。

「今は飛行中だよ」

『危険な事はしてないよね？』

「あ？ ああ。もちろんだよ。心配するな」

『私、悟に報告があるのよ！』

「報告？」

『私、赤ちゃんが出来たの、悟の赤ちゃんが』

「何？ ホントか？」

『ホントよ。病院で検査してもらったら3ヶ月だって』

「エリカ、やったな・・・俺の子か・・・ありがとう、ありがとう」

『だから・・・早く・・・帰っ・・・<ザザザッ>・・・』

「あ、エリカ？ エリカ聞こえるか？」

『・・・<ザザー>・・・<プツン>』

切れてしまった。だが悟は感無量だった。

「俺が親になる・・・」

自分の血を分けた子供が誕生するのだ。悟は体がホカホカと温かくなる思いだった。そして、改めて気を引き締め前方を睨んだ。

「エリカ・・・俺の子を頼んだぞ。俺はお前達の未来を守るために戦う」

いよいよ敵の上空に差し掛かった。  
悟の周りにも対空砲火の爆発で沢山の煙が広がった。  
悟は敵機が来ないことを願った。

「このまま突っ込ませてくれよ・・・」

しかし、それは虫の良すぎる相談だった。  
間もなく太陽の中から敵機が次々と降って来た。  
護衛機がそれに向かっていく。悟の周りでは激しい空戦が始まっていた。  
悟は突入する敵艦を物色し始めた。もちろん一番大きい空母が目標だ。

いた。主力空母だ。

悟がその敵艦に向けて進路を取った時だった。  
味方の護衛機を振り切った1機の敵機が悟に向かって一直線に突っ込んでくる。機銃を撃ちっぱなしである。危ない、やられる！  
その時、悟の後方から1機のゼロ戦が飛び出してきた。木村二飛曹の機である。そしてそのまま敵機に正面衝突した。

「あっ！ 先輩！」

ドドーーーーン！！！！

敵機も体当たりした木村機も一瞬の間に大爆発を起こして空中から消え失せた！

「必ず貴様達を無事に送り届けてやる。俺の命に代えてもな」

木村先輩の言葉が悟の脳裏に甦った。涙が溢れて止まらない。

「木村先輩・・・チクショー！ 俺を守るために・・・木村先輩、見ていてください。俺は必ず敵艦を沈めてみせます！」

もう覚悟は決まった。悟は静かに操縦桿を前に倒し、機はゆるやかに下降姿勢に入った。グングン敵艦が大きくなって来る。敵が撃ち出す対空砲火がまるで砂を掴んで投げつけるがごとくに悟の機に向かって飛んでくる。

ガンガンガン！ バンバン！ ガチャ！ ガンガン！ バチン！

敵の弾が悟の機体に当たっている。しかし、悟は目を皿のように見開いて敵艦目がけて必死に機を操る。

敵艦の兵隊達が悟の機を見上げて恐怖の表情を浮かべて逃げ惑っている。

悟は敵の航空母艦の飛行甲板に狙いを定めた。

あと500m・・・300m・・・100m・・・間も無く激突である。

悟の目前には敵艦の飛行甲板が大きく広がり迫っていた。悟は大きく目を見開いた！

「うわぁー！ エリカー—————！！！」

ドガガガッ！

悟には機が衝突する瞬間がスローモーションのように見えた。

そして激しい閃光と大音響！

ドドド————ン！！！！

飛行甲板上に巨大な火柱が立った。

「翔くーん。ほらっ、ママのこと見て？」

エリカは1人息子を抱き上げるとホッペにキスをした。  
まだ1歳の翔は、少し機嫌が悪いのかイヤイヤしている。

「もう翔くんったら、お腹が空いたのかな？」

「エリカ、お母さんがミルク作ってくるから待ってなさい」

「あ、ごめーん。翔くーん、バアバがミルク作ってくれるって。よかったねー」

そう、エリカは高校を中退して悟の子供を出産していたのだ。  
エリカにとって翔は生きがかった。なんたって最愛の悟の血を引く息子なのだから。

「なに？ 翔くん。パパが居ないからご機嫌が悪いのかな？」

翔はミルクが待ちきれずに指をしゃぶり始めた。

「翔くんのパパはね」

その頃、靖国神社の境内で一心に祈る男がいた。

「田中、千葉大尉、木村先輩、どうか安らかにお眠りください。この日本は皆様のおかげで平和な国になりました」

それは悟であった。

そう、悟は敵艦に体当たりした瞬間に、再び現代へとタイムスリップしていたのだ。  
悟が戻った瞬間から、歯車は元通りになり、周りの人間達は悟が一時期存在しなかったことすら記憶にないような状態だった。

悟は、ことある毎に靖国神社を訪れては、散っていった先輩や同僚、そして敵味方を超えてあの戦争で亡くなった方たちの冥福を祈るようになっていた。

それは右翼思想でも何でもない。不思議な力によってあの時代を経験して初めて分かったこと。  
若い命を散らした仲間達に対する尊敬と哀惜の想いからであった。

「ただいま！」

「おかえりなさいーい。ほら翔くん、パパが帰ってきたよー」

翔は嬉しそうに悟を見上げてダッコをせがんだ。

「よーし、ほら、高い高ーい！」

翔の弾けるような笑い声が部屋中に響く。

悟はエリカと顔を見合わせ微笑んだ。

この6月には、子連れで結婚式を挙げる予定になっている。

やっと訪れた幸せな日々であった。

「悟？」

「ん？」

「もう、どこにも行っちゃダからね」

「どうしよっかな？」

ポカッ！

「イテッ！ 分かった、分かりました。どこにも行きませんって」

「ウフフッ、分かればよろしい」

チュッ！

「愛してるよ、悟！」

## おまけ

---

エリカです。

あの伊藤麻衣ですけど、例のクラブで知り合った彼氏と続いているみたいです。  
私のうちからお嫁に行くなんて言ってたくせに、今では彼の家に入り浸りなんですよ。  
ただし結構ケンカも多いみたいですけど。なにしろ麻衣も元レディースですからね。

でも、時々はうちに遊びに来ます。翔と遊ぶためにね。

そうそう、そう言えば悟が戻ってきた途端に、周りの人達から悟が居なかった期間の記憶が無くなってしまったんだけど、何故か麻衣だけは憶えていてくれたの。

悟と再会して嬉し涙を流している私を不思議そうな顔で見る人が多い中で麻衣だけは一緒に喜んでくれたんです。

最近の私は、もっぱら麻衣の彼氏に対する愚痴やノロケを聞く係になってます。

あの子との腐れ縁はまだまだ続きそう。

まあ、いっか。

これからも、よろしくね、麻衣！

そして、悟のことを守ってくれた戦友の皆さん、どうか安らかにお眠りください。

悟も私も、貴方達のことは絶対に忘れません。

本当にありがとうございました。